1 小国 513

文部省検定済教科書

かしの木広場

5年

太郎花子国語の本

日本書籍国語編修委員会

60402

教科書文庫

6

810

34-1949

260000
19414

昭和24年10月10日
文部省検定済
小学校国語科用

かしの木広場

5年上

資料室
375.9
N:16
廣島大學圖書之印
広島大学教図書
19414

もくろく

1 すきな絵
一 たんぽぽの花……4
二 いずみ……5
三 すきな絵……8

2 かしの木広場
一 いい仕事……12
二 しげる……18
三 かしの木広場……25
四 ふしぎ……33
五・五つのすばこ……37

3 学校通信
一 ひのき村の学校通信……42
二 北島村の学校通信……49
三 水道町の学校通信……58

4 放牧——ある馬の話
一 牧場へ行く……64
二 スクラム組んで……70
三 牧手さん……75
四 楽しい日……80

5 発電所
一 すばらしいアイスクリーム……84
二 なかよしげんか……90
三 子どもの花たば……95
四 貯水池……99
五 エレベーター……103
六 新しい生活……110

6 子どもの海
一 突堤……116
二 燈台……117
三 新しい船……118
四 ぼくたちは答える……119

7 北極探険
一 ノルドマルカの森……123
二 少年フリチョフ……127
三 ヴィキング号……128
四 グリーンランド横断……133
五 氷上の木とごみ……135
六 フラム号……138
七 北極へ……140
八 氷の圧力……144
九 北緯八十六度十四分……146
一〇 フラム号帰る……150
一一 平和の人……152

8 問題
一 あたたかな、黄色な……(11)
二 会話の力……(12)
三 学校通信のへん集……(15)
四 音、声、ようす……(17)
五 あった、なった……(19)
六 待ってる……(20)
七 「北極探険」の共同研究……(21)

廣島大學圖書之印

1

すきな絵

一　たんぽぽの花

たんぽぽの　黄色な花、
お日さまのように、あたたかな。

人にふまれても、
しもにいたんでも、
石の間にも根を張るたんぽぽ……

たんぽぽは、小川のほとりに
知らぬ間に、さきだしている。

ああ、もう春だ。
春のお日さまのゆめが、いちばん先に、
たんぽぽの花にさいている。

二　いずみ

いずみ、いずみ、
いずみのほとり。
わたしたちが集まる、
学校の
いずみのほとり。

わたしたちは、
話し合う、
五年になったことを。
みんなの考えている、
これからのことを。

いずみは、
聞いている、
わたしたちのことを。
みんなの考えている、
これからのことを。

にいさんも、ねえさんも、
ここへ来て、話し合った。
いずみは知っている、
その時のことを、
その時の美しい話を。

いずみ、いずみ、
静かないずみ。
いつも、いつもきれいな、
学校のほとりの、
いずみ。

三　すきな絵

ぼくは、この絵がすきだ。
おかの上に、一本立っている、すばらしい緑の木。
色えんぴつで、むぞうさにかいた、その緑が、
いつも、いつも、ぼくを楽しくしてくれる。
この絵が、ぼくはすきだ。

ぼくは、学校から帰ってくると、
すぐに、この絵を見ずにはいられない。
つかれたときにも、かなしいときにも、
ぼくは、この絵を見ずにはいられない。

ぼくのつくえの前のかべに、
虫ピンでとめた、おさない、子どもの絵、
ぼくは、この絵がすきだ。

おひな様の、はこの中に、
この絵は、しいてあった。
空気にさらされていたところは、
もう、色が変っていたけれど、
みずみずしい緑の色は、
すっかり、ぼくの気にいった。
おかあさんは、
なんて、へんな絵でしょうと、おっしゃって、

この絵を、すてようとなさった。
けれども、ぼくは、しょうちしなかったのだ。

だれがかいたか、ぼくは知らない。
おかあさんも、知らないとおっしゃるのだ。
けれども、ぼくは、時々、考える。
もしかしたら、おかあさんが、かいたのではないかしら。
どこかで、見たようなけしきだ。
たしかに、見たようなけしきだ。

ぼくは、この絵がすきだ。
おかの上に、一本立っている、

かがやく、美しい緑の木——
ぼくは、この木がすきだ。
この木を、生き生きとかいた、
この絵が、ぼくはすきだ。

2

かしの木広場

一　いい仕事

春山太郎が学校通信を読んでいると、夏川まさると南ただしが遊びに来た。

「春山君、かしの木広場へ行かないか。」

と言う。まさるは、なんだか、うれしそうに、にこにこしている。

「かしの木広場へ行くって——何かいいことがあるのかい。」

「これさ。」

まさるが、そう言って、持ってきたはこのようなものを、えんがわに置いた。

「小鳥のすばこさ。」

と、ただしも、つづいて、そう言った。

まさるのすばこは、板で作ってあって、家の前にあるゆうびん受けのような形をしている。ただしのは、太いまるたを、わ切りにしたような形だ。両方とも、前のところに、小さいあながあけてある。

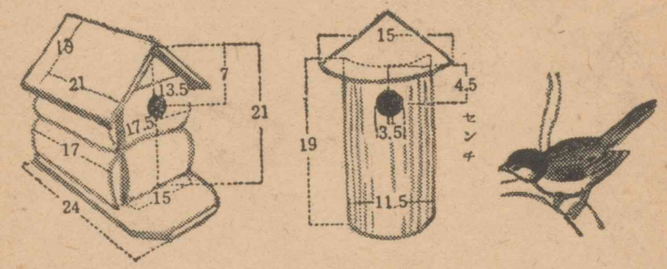
「これ、あけられるんだぜ。」

まさるは、はこの屋根になっているところを、あけて見せる。

「ふうん、そこをあけて、どうするんだい。」

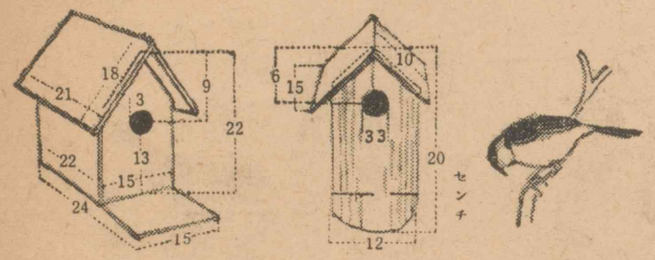
「鳥のようすを見るんだよ。君、知らないのかなあ。」

太郎は、小鳥のすばこについては、よく知らないので、まさるに、そう言われてもなんとも言いようがない。



しじゅうから大の鳥のすばこ

「これを、木にかけるんだね。」
「そうさ。それで、君をさそいに来たんだ。」
「ああ、そうか。でも、ぼくは、今、仕事をしているんだがな。」
「仕事って、いそぎのこと。」
と、ただしが聞いた。
「うん、東京の学校通信を読んでいるんだよ。でも、それは、あとで読むことにしよう。」
と、太郎は言った。
きょうは日曜だ。きのうから楽しみにしていた学校通信も、早く読んでしまいたい。けれども、天気はいいし、すばこをかけに行く方が、どうもおもし



こがら大の鳥のすばこ

ろそうだ。
「ぼくは、なんにも持っていかなくってもいいの。」
「ああ。今すぐ、にいさんが来るから、そうしたら、君に持っていってもらうものが、あるかも知れないよ。」
「しげるさんも、来るんだね。」
「ああ。にいさんが来ないとこまるんだ。」
「どうして。かしの木広場なら、わかってるじゃないか。」
「だって、にいさんが、すばこをかけるんだもの。」
「なあんだ。しげるさんが、かけるのか。」
太郎はそれを聞いて、やっぱりそうだったのかと

思った。実は、まさるや、ただしが、自分たちだけでこんなことをやり始めたのが、少しふしぎだったからだ。

「じゃ、このすばこも、君たちだけで作ったんじゃないんだね。」

「ぼくは、作ったんじゃない。」

と、その時、ただしが言った。少しきげんの悪い言い方だった。

「ぼくは作らなかったけれど、夏川君は、半分ぐらい作ったんだ。しげるさんの助手だったんだから。」

「じゃ、南君も、きょうが初めてなの。」

「そうさ。夏川君は、だれにも言わないんだもの。知るはずがないじゃないか。」

と、ただしは言った。

「ぼくも、手伝いたかったなあ。」

と、太郎は言った。

「ぼくも知ってれば、手伝わしてもらったのになあ。」

「ぼくも、そうなんだよ。それだのに、さっき、夏川君は、すばこは、小鳥のためにもなるし、木のためにもなるし、人間のためにもなるし、実にいい仕事だってじまんするんだ。そんなにいい仕事なら、みんなでやったらいいじゃないか。」

と、ただしは言った。

「ぼくは、じまんなんかしなかったよ。」

「でも、君は、じまんそうに話したじゃないか。」

「あ、しげるさんだ。」

と、その時、太郎が、門の方を見てさけんだ。まさるとただしも、そっちを見た。しげるが、赤星東一と秋野ちよ子をつれて、門からはいって

きた。三人とも、一つずつ、すばこをかかえて、にこにこしながらやってきた。

二　しげる

「おはよう。」

と、しげるは言った。

「今、そこで、ふたりにあったらね、いっしょに行くと言うもんだから、すばこを持ってきてもらったところさ。すぐ、出かけようか。」

太郎は、しげるが大すきだ。しげるは、高等学校の二年生である。朝早く家を出て、帰るのはおそい。だから、このごろは、あまり太郎たちと顔を合わせることはなかった。けれども、仕事をたのんだり、何か相談に行ったりすると、どんなことでも、必ずやってくれた。弟のまさる

の話によると、夜もねないでやってくれたことがあったそうである。そういう時でも、しげるは、決してそんなふうには見えなかった。だから、たいていの者は、しげるが、そんなに、自分たちのために打ちこんでやってくれたのだとは、気がつかないことが多かった。

去年の夏、しげるたちの学校で、はなしがいの馬を見学に行ったことがあった。そのほうこく書の中で、先生がいちばん感心したのは、しげるのほうこく書だった。それは、新聞にも大きくのせられて、村の人々をびっくりさせた。

しげるは、頭がいい。勉強家である。けれども、だれも、てん取り虫などとかげ口を言う者もなかったし、じっさいそう思う者は、だれひとりもなかった。しげるは、だれとでも遊んだり、ふざけたりした。そういう時には、みんなにわらわれるような、とんでもない失敗だってする

のである。しげるのような人ならば、だれだってすきになるにきまっている。ただしが、さっき、まさるにばかりおこって、まさるのにいさんのことを悪く言わなかったのも、そのためである。

「どうしたの、まさる。みんな、行かないのかい。」

しげるは、みんながだまっているので、弟にそうたずねた。

「ええ。」

と、まさるが、何か言いかけたとき、

「ぼくは、行かないよ。」

と、ただしが、急に、そう言った。

「君が、行かないって。」

しげるは、びっくりした。

「行きませんよ。ぼくは、木のぼりはあまりじょうずじゃないし、すば

こだって自分で作ったわけじゃないんだから。」

「だって、木のぼりは赤星君がいるもの……。」

「ぼくは、いやなんです。」

「どうしたの、南君。」

しげるは、ただしの顔を見て、そう言った。

「しげるさん。南君は、おこっているんですよ。」

と、太郎が言った。

「南君が——どうしたんだろう。」

「しげるさんは、すばこのことを、だれにも教えてくれなかったでしょう、まさる君にだけは話して。なぜ、みんなには、話してくれなかったんですか。」
「ああ、そのことか。わかった。」
しげるは、えんがわにこしをかけて、言った。
ただしは、立ったままで、しげるの顔を、正面から見つめながら、こう言った。
「すばこぐらいなら、ぼくたちにだって、できますよ。」
「それはできる。やさしいことだものね。でも、ぼくは、こう考えているんだ。」
と言ったとき、しげるのわらい顔は、急にまじめになった。
「ぼくは、小鳥がすきだ。小鳥をかわいがってやることは、ぼくにはほ

んとうにうれしいことなんだ。けれども、みんなが、だれでも、ぼくのようにすきだということはない。小鳥のきらいな人だって、いるかも知れない。そういう人たちに、小鳥をかわいがれとか、すばこを作れとか言ったって、本気になってやるとは限らない。大勢でおしつければ、そういう人たちもやる気になるかも知れないが、それは、ほんとうのいい仕事にならないと思う。」
「ぼくも、南君も、小鳥がすきですよ。」
と、太郎が言った。
「そうだね。小鳥のきらいな人なんて、じっさいにいるかどうかわからない。けれども、ほんとうに小鳥をかわいがる気持は、小鳥をよく知ってからでないと、わき出ては来ないだろう。すばこだって、そうだ。言われただけで、作ってかけておけば、それで、仕事がすんでしまう

というのではいけないんだ。ぼくは、ほんとうの、しっかりした、いい仕事は、だまってやっていても、きっと、みんなが、力を合わせてやってくれるようになるものだと思う。そして、それから、だんだんに大きな力になっていくのだと思う。」

そこで、しげるは、ちょっと言葉を切って、にこにことわらった。

「ぼくはね、初めから大げさにやることが、どうしてもできないんだよ。ほんとうを言えばね、すばこが成功するかどうか、つまり、小鳥がやってきてくれるかどうか、そして、虫を取ってくれるかどうか、それが、ぼくには自信がない。失敗なら、それは、ぼくひとりの失敗にしておきたい。うまくいくまでは、ぼくだけで、やっていこうと思ったんだ。君たちに、そんなにおこられるとは思わなかったけれども、なるほど、考えてみると、自分だけの考えにばかり熱心で、君たちの気

持は、ちっとも考えていなかったんだね。これはまずかったなあ。」

ただしは、聞いているうちに、だんだん心がほぐれてきた。

「そこで、南君。」

と、しげるは言った。

「君は、みつばちかいの名人だから、こんどは、小鳥かいの名人になってもらいたいね。」

「名人だなんて……。」

ただしは、みんなのわらい顔に囲まれて、すっかりはにかんだ。

三　かしの木広場

かしの木広場というのは、七草山の後にあって、みんなにどんぐり山とよばれている、小山のいただきに近い所である。そこには、名前の通

り、大きなかしの木が、一本立っている。ふもとの方からも見える、みごとなかしの木である。かしの木の前は、広場になっていて、今ごろは、もういちめんに青草がもえ出ている。

むかし、子どもたちのおとうさんや、おかあさんがまだ子どものころ、お祭や、何かのお祝いがあると、子どもたちは、そこに集まって遊んだ。楽しみの少いそのころの子どもたちが、待ちに待った日、みんないっしょになって、自分たちだけで遊ぶことのできるのは、この、かしの木のほとりだった。

かしの木は、じょうぶで、正直で、すなおな子どもたちが、晴着を着て集まる日がすぎると、また、静かな日を送りむかえた。そのうちに、いつのまにか、そういうお祭や、お祝いの日にも、子どもたちは集まって来ないようになった。そのころ、かしの木はますます大きくりっぱに

なって、秋になると、そのあたりに、いっぱい実を落した。それは、子どもたちが、拾っても拾っても拾い切れないほど、たくさんあった。

かしの木広場が、すばこをかけるのにいい場所かどうかは、しげるにもわからなかった。けれども、どこにかけようかと思ったとき、まっ先に考えついたのは、かしの木広場だった。あの、大きなかしの木に、きれいな小鳥たちが、あ

っちからもこっちからも、やってくる。それを考えると、まさるは、早くすばこをかけてみたくて、しようがなかった。きょう、出かけてきたのも、実は、まさるが、どうしても、きょう行くんだと、がんばったからである。

どんぐり山へのぼる道は、そんなに急な坂ではないが、ぐるぐるとうねっている。まだ時間が早いのか、だれにもあわない。先に立った太郎とまさるとただしの三人は、いつのまにか、かけ足になって、見えなくなってしまった。

「すばこには、どんな鳥が来るでしょうね、しげるさん。」

東一がたずねた。

「そうだね。山がらでも、しじゅうからでも、むく鳥でも、大体、どんな小鳥でも来る。」

「だれかに、すばこを持っていかれると、こまりますね。」

「そんなことはない。持っていっても、しようがないもの。それにね、すばこは、はり金でしばりつけるんだし、ちょっと高い所にかけるんだから、そう、かんたんには取れないさ。」

「でも、いたずらされるかも知れないでしょう。」

と、こんどは、ちよ子が言った。

「いたずらされてもいいさ、また、直しておけば。人間のいたずらだけでなく、小さなけものや虫で、すばこを占領するのがいるから、どうせ、時々、調べに行かなければならない。くもだの、へびだのが、はいることがあるそうだからね。」

「まあ、きみが悪い。」

「だから、始終注意をして、小鳥たちのいいお宿にしてやらなければな

らないよ。」

「ほんとうね。小鳥のお宿だわ。この光村へ来れば、いちばん上等のお宿があるって、小鳥たちがみんな言うようになると、うれしいわ。」

「ホテルだよ。かしの木広場の　かしの木ホテルだ。」

と、東一が言った。

「そうだ。かしの木ホテルだ。」

と、しげるも言った。

しげるがすばこの事を聞いたのは、自てん車で学校から帰るとちゅういっしょになった、営林署の高島さんからだった。光村にも、だんだん虫の害がふえてきている。特に山林地の木で、虫害のためにかれるものが目立ってきた。虫をいちいち取ることは、どんなに人手があっても、なかなかできないことである。虫害をのぞくには、小鳥に虫を取っても

らうのが、いちばん手近な、こうかのある方法である。だから、小鳥がたくさん村へ来るようになればいい。それには、すばこを作ってやることが、いちばんいいのである。

高島さんは、これから、だんだんにそういう仕事もしたいのだと言った。しげるは、次の日早く、高島さんをたずねていって、すばこのことや、小鳥のことなど、いろいろの話を聞いた。それについて参考になる本の名も、教えてもらった。それが、二十日ばかり前のことである。

しげるは、高島さんに、すばこを見てもらったり、かけかたを教えてもらったりするつもりでいた。ところが、高島さんは、急用があって、おくにへ帰った。高島さんが来るのを待っているのは、まさるが、どうしてもしょうちしない。今できているのは、ぼくたちでかけようというのである。しげるも、できないことはないと思った。それで、きょう、

かしの木広場へ行こうということになったのである。
まもなく、三人は、かしの木広場へのぼり着いた。かしの木の下まで来たが、先に来ているはずの、太郎たちのすがたが見えない。
「おや、まさる君たち、どうしたんだろう。」
と、東一が言った。
「おかしいな。上まで行ったのかしら。」
「そんなはずないわ。」
「おうい、春山くうん、南くうん——」
東一は、大声でよんだ。遠くから、こだまがかえってきた。けれども、返事はない。
「きっと、どこかにかくれてるのよ。」
「そうだ。かくれてるんだ。」

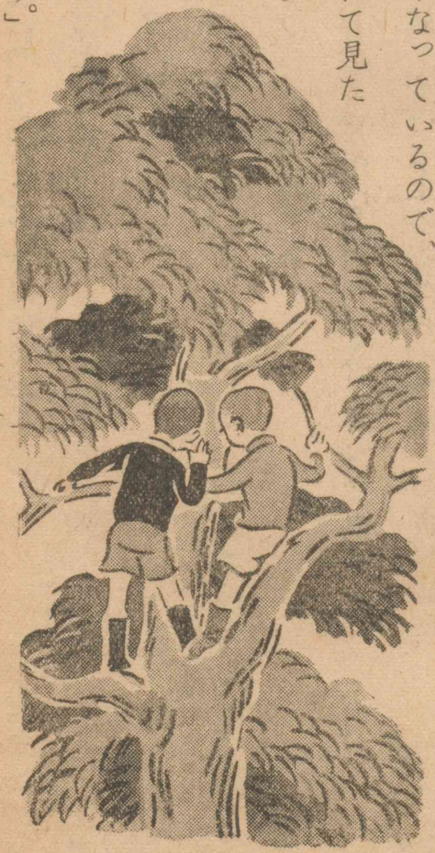
東一がそう言ったとき、かしの木の上の方で、
「わっはっはっは。」
と、わらい声がした。

四　ふしぎ

しげるは、かしの木の後にまわって、上を向いた。まさるの半ズボンが、ずっと上の方の、葉の間に見えた。
「あ、あんな所にいる。」
すると、右の方のえだがゆれて、葉の間から、太郎が顔を出した。
「しげるさん、ずいぶん早いですね。」
「君たちこそ、そんな所で何しているの。」
「すばこをかけるんでしょう。早く、持ってのぼってきてください。」

「そんな高い所じゃだめだよ。」
「え、しげるさん、のぼれないんですか。」
「そうじゃない。すばこをかけるのに、高すぎるんだよ。」
「春山君。ふしぎ、ふしぎ。」
と、その時、まさるが、葉の間から顔を出して、言った。
「なんだい、ふしぎって。」
「ここへ来てごらんよ。早く、早く。」
「君のふしぎなんて、つまらないものにきまってるさ。」
そう言いながらも、太郎は、木のえだをすべったり、幹にかじりついたりして、まさるのそばへやってきた。
「ほら。」
まさるは、その、幹の一部分を指でさした。そこは、木の皮が、とこ

ろどころ、はげていた。
「それが、どうしたのって、君。これは、字だぜ。」
「どうしたのさ。」
そう言われて、よく見ると、はげた所が、字のかっこうに見えた。もう古くて、黒くなっているので、ちょっとはなれて見たのでは、わからないのだ。
「ね。」
「うん。」
「読めるだろう。」
『え』という字が、読めた。けれども、その上の所がわからない。



「ここの所は、変だね。」
「まだ、読めないの。『た』じゃないか。」
「ああ、『た』だ。上のぼうが、太すぎるんだ。」
「ねえ、『たえ』なんだよ。『たえ』って、なんだろう。」
「あ、ほんとうだ。やあ、君、これはぼくのおかあさんの名前だよ。どうしたんだろう。ふしぎだなあ。」
「そうか、君のおかあさんの名前か。ふしぎだなあ。」
すると、今度は、もっと上の方から、ただしの声がした。
「おうい、夏川君。ふしぎ、ふしぎ。」
「君もふしぎか。ぼくもふしぎなんだ。」
「じゃあ、君のふしぎも、字が、ほってあるんだろう。」
「うん、『たえ』だ。春山君のおかあさんの名前なんだ。」

「ぼくのは、『ゆき』だよ。」
「やあ、それなら、ぼくのおかあさんだ。」
まさるはさけんだ。
まさるは、むちゅうになって、ただしのそばまでのぼっていった。
「どれどれ——ほんとうだ。ほんとうだなあ。」
まさるは、思わず、自分のてのひらで、『ゆき』とほられた、固い木の幹をなでた。
「おうい。みんな、どうしたんだよう。だんだん、のぼってっちゃって、だめじゃないか。」
その時、下の方で、しげるの声が聞えた。

五　五つのすばこ

むかし、かしの木広場に集まってきた子どもたちの中に、少しずつ年はちがっていたが、特別になかのいい五人の女の子がいた。子どもたちが、お祭の日に集まらないようになってからも、五人の女の子は、月に一度ずつ、かしの木の下に集まって、遊んだり、話をしたりした。そのころは、五人の女の子も、小学校を卒業して、ふたりは町の女学校へ行き、ふたりは家で働き、もうひとりは、町の工場で働いていた。

それから、しばらくたつと、むすめたちのひとりが、およめいりをすることになった。そのむすめは、こういうことを、みんなに相談した。

「もうこれからは、今までのように、みんなと遊ぶことはできなくなるでしょう。けれども、わたしは、今まで、みんなとしあわせにくらしてきたことを、わすれることはできません。」

そして、いつまでも、みんなとかしの木とに、心をむすびつけておく

ために、かしの木に、名前をほってもらおうと思うと言った。

みんなは、それにさんせいした。そして、夫になる青年の手で、かしの木のはだに、むすめの名前が、ていねいに、はっきりとほりつけられた。それは、「ゆき」であった。こうして、次々に「さよ」、「つゆ」、「たえ」と名前がほられた。だが、最後の「かすみ」だけは、長い病気のあとで死んだので、あとから、新しく、ほりつけられたのであった。

かしの木の下の、じょうぶで、正直で、すなおな女の子たち——そんな女の子たちの心が、このかしの木にきざまれているとは、太郎も、まさるも、ただしも、考えつかなかった。

しげるも、東一も、のぼっていった。

『つゆ』も、あったよう。」

と、すぐに、上から、東一の声がした。

「まあ、よかった。どうも、ありがとう。」

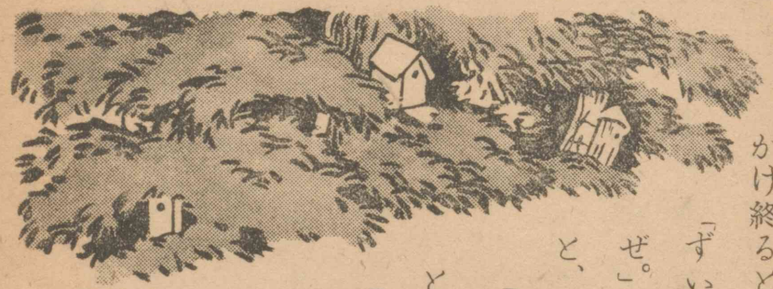
ちよ子は、手をたたいて、喜んだ。「つゆ」は、ちよ子の母である。

木の上で、五人は、五つのすばこを、それぞれ、おかあさんたちのすばこにすることにした。「さよ」と「かすみ」は、だれのおかあさんかわからなかったけれど。

すばこをかけるには、その辺では少し高すぎたし、幹のまわりも太すぎて、はり金でまきつけるのがなかなか大変だったけれども、しげるは、そんなことは、だまっていた。

「——さあ、これで、すんだ。」

最後に、「かすみ」のすばこを



かけ終ると、しげるは、あせをかきながら、そう言った。

「ずいぶん、目立つね。きっと、小鳥たち、すぐ見つけるぜ。」

と、東一が言った。

「新しくって、気持がよさそうだね。」

と、まさるが言った。

「しげるさん、すばこの中には、何も入れておいてやらなくても、いいんですか。」

と、太郎が言った。

「小鳥たちが、自分で持ってくるから、だいじょうぶ。」

と、しげるは、それに答えて、

「さあ、ちよ子さんが待ってるから、早くおりよう。」
と、言った。
やがて、みんなは、ぐるりと、かしの木を囲んだ。
五つのすばこは、少し前にかたむいて、かかっていた。
みんなは、いつまでも、それを見上げていた。

3 学校通信

一 ひのき村の学校通信

小鳥のすばこについて、太郎たち五人の書いた文が、学校通信にのった。そうすると、どんぐり山のすばこが、急に、ふえ始めた。大きい木にも、小さい木にも、さまざまなすばこがかけられた。「山がらさんのお宿」などと、自分のすきな小鳥の名前を書いたふだをつけたのもあった。

太郎たち五人は、みんなに、いろいろなことを聞かれるので、なかなかいそがしかった。太郎たちがわからなくなると、しげるのところへ、聞きに行く。それで、しげるもいそがしくなった。

学校通信は、学校の仕事や、いろいろなようすを、生徒の家へ知らせるために、発行される、とうしゃばんずりのすりものである。けれども、家の人たちが読む前に、たいてい、子どもたちが読んでしまう。

しげるは、太郎たちの文を、営林署の高島さんに読んでもらった。高島さんは、大変に喜んだ。そして、自分が前にいたところの学校でも、小鳥のすばこを作っているという話をしてくれた。その話は、まさるから、組のみんなに伝えられた。みんなは、その学校に、学校通信を送ってあげることにした。その学校というのは、ひのき村小学校である。

光村小学校五年生のみなさん。

あなたがたの学校通信を送っていただいて、ほんとうにありがとうございました。国語の時間に、かわるがわる読んで、いろいろ話し合いました。光村がどんなによい村であり、光村小学校がどんなによい学校であるかということが、どの記事をよんでも、よくわかりました。私たちのやっていないこと、気のつかないでいたことも、いくつかありました。特に感心したのは、悪いと気のついたことは、どしどし取り上げて直していこうという気持が、強く現われていることでした。どうぞ、これからも、新しい学校通信が出ましたら、必ず送ってください。お願いいたします。

次に、私たちの学校通信を送ります。まだ、発行されてから三号にしかなりませんので、これからが大切だと、みんな考えています。四号からは、ページ数もふえますから、もっとりっぱになります。お気づきになったことがありましたら、どうぞお知らせくださるように、これも、お願いいたします。

では、みなさん、お元気で。

ひのき村小学校五年生

こういう手紙が、まもなく、みんなのところへとどいた。それといっしょに、ひのき村小学校の学校通信も送られてきた。次の文は、その中の一つである。

森林鉄道（ひのき村小学校の学校通信より）

きょうは、営林署の人たちといっしょに、森林鉄道で、国有林のおく深くまで行った。村の人たちは、町へ出るときには、いつも、この森林鉄道のお世話になる。この森林鉄道をのろいのろいと言う人もいるけれども、今のところ、町まで行く乗り物はこのほかにはない。

もともと、この森林鉄道は営林署で使うためにできたものだが、近くの村の人たちのために、午前と午後に一回ずつ、客車を二台連結している。ぼくも、これまでになんべんも、町へ行ったことがある。けれども、町と反対に、国有林のおくの方へ行くのは初めてだ。

川にそって、列車は、少しずつのぼっていく。気がつかない中に、だんだん、川のはばがせまくなってくる。約四十分ばかりたつと、木立が、深くなってくる。あたりが、しめっぽくなったような気がする。営林署

の人たちは、いろいろ、話をしてくれる。

この国有林の木は、大体、ひのき、さわら、あすなろ、ねずこ、こうやまきなどが、全体の約二分の一、まつ、もみ、つがなどが約三分の一、なら、ぶな、とちなどが約五分の一だという。いい木がゆたかにあるのは、ほんとうにありがたいことだ。ぼくたちの村に、来年建つことになっている中学校の材木も、大体、村有林のひのきで作ることになっているし、それにひ用も、村有林の材木を売ったお金を当てるのだという。実は、ぼくたちの小学校も、夏、山のぼりの人たちが来ると、きっとすばらしい建物だと言って、びっくりするのだ。これも、村有地のひのきが使ってある。

緑の木の間からもれてくる日光が、しめった土の上や、川の水の上や、ぼくたちの上にさす。一時間ばかりたったと思うころ、ぼくたちはおり

た。営林署の建物で少し休んでから、ぼくたちは、小さな谷川にそって、森のおくの方へ行った。

しばらく行くと、五、六けんの家があった。それは、きこりの人たちの家だ。ぼくたちは、その中の一けんにはいった。まだ少し早かったけれど、そこで、おべんとうを食べた。るすばんのおじいさんは、大変喜んで、くしにさして焼いた魚をごちそうしてくれた。この家には、十二、三人の人がねとまりしているという。おどろいたのは、ここには電話があって、おじいさんも電話をかけるのに、相当なれていたことだ。

そこを出て、また、しばらく行くと、道は谷川から別れて右の方へのぼっていく。おのの音が、聞えてくる。太い立木の向こうに、上半身をはだかになって、おのをふり上げているきこりのすがたが見える。おのがふりおろされてから少したって、パーンという音が聞えてくる。やが

て、ズシーンと、地ひびきをたてて、太い木が、向こうがわにたおれた。こうしてたおされた木が、町の方へ運ばれるまでには、まだ、なかなか手数がかかる。もっと深い山になると、谷をわたって、命がけで運ばなければならないということだ。

きこりの人たちは、二十才ぐらいからで、わかい人が多いが、六十才ぐらいのおじいさんもいる。みんな、うらやましいくらいがっしりしたからだをしていて、親切だ。ぼくたちと話しているときにも、よくわらう。

ぼくたちは、帰りの列車がそろそろ来るというので、急いで、もとの道をおりていった。もう、夕方のように、すずしかった。

二　北島村の学校通信

ただしは、学校通信を、北海道の友だちへ送った。川田君である。川田君は、工作がとくいである。たいていの時は、何か作っている。ただしが北海道をたつとき、川田君は、

「これは、ぼくのだいじなもんなんだけれど。」

と言って、自分で作ったゆうびん受けをくれた。すばこを作っているとき、ただしは、川田君がいたら、きっと、りっぱなすばこを作るにそういないと思った。

そこで、川田君にそのことを書いて、学校通信を送ったのである。川田君からは、しばらくたって、次のような返事が来た。

南君。もとの学校から、君のお手紙がまわってきて、きょう、とどいた。ぼくに手紙が来るなんて、だれからだろうと思ったら、君からだっ

た。ぼくは、うれしくて、とびあがりそうだった。

君の、小鳥の話は、ほんとうにおもしろかった。君には、いい友だちや、せんぱいがあって、うらやましいと思う。おじいさんが北海道へ君をむかえに来られたとき、ぼくも、ほんとうにいっしょに行きたいと思ったのだけれど。夏川しげるさんには、ぜひ、しょうかいしてくれたまえ。

ぼくは、ことしの春から、新しい学校へ来た。父のつとめが、かわったからだ。もとの所も寒かったけれど、ここは、もっと寒いという話だ。寒いのは平気だけれども、不べんな所なので、読みたい本があっても、なかなか見られないことがある。

それでも、この間、この島に、大じけんがあった。そのことについては、ちょうど、ぼくたちの学校通信の特別号にくわしく書いてあるから

それをお送りしよう。

お知らせしたいことは、山ほどあるけれども、また、今度書くことにする。君のクラスの人たちに、どうぞよろしく。

川田五郎

南　ただし様

ただしは、川田君の送ってくれた学校通信を、みんなに見せた。その中の、日食の話は、みんなをうらやましがらせた。

金環食（北島村小学校の学校通信より）

二月のなかばごろから、日食の話で、村はにぎわいました。そのころになると、日食を観測するために、アメリカの人たちや、日本の学者たちや、新聞社の人たちが、大ぜい、村へやってきました。アメリカの人たちのジープ、新聞社の人たちのオートバイや、サイドカーなど、村は、今までにないにぎやかさになりました。

その後、理科の時間に、先生が、日食についてのくわしいお話をしてくださいました。気しょう台の人のお話もききました。天気が悪いと観測ができないというので、どうか、五月九日は晴れてくれますようにと、みんな思いました。

いよいよ、九日になりました。まだ夜の明けない中に、私は、板屋根をたたく雨の音に、目をさましました。とうとう、雨です。せっかく長い間苦心をなさった方々の心を思うと、私は、お気のどくでなりません。どうしても、天気をよくしてあげたくてたまりません。

すると、しばらくして、

「島は、朝のうちはくもり、または、時々小雨がふりますが、昼ごろから、だんだん晴れてきます。」

という放送がありました。私は、とびあがるほどうれしくなって、思わず、

「まあ、うれしい。おかあさん、お天気がよくなるそうですから、おべんとうを作ってください。」

と言って、急いで、したくをしました。

私の家から、金環食の見えるところまでは、八キロほどあります。八時ごろ家を出て、十時半ごろ、やっと、そこへ着きました。あっちにも、こっちにも、日食を観測する望遠きょうがずらりとならんでいます。私たちは、そのそばのおかにのぼって、見ることにしました。すると、だんだん空が晴れて、太陽が、きらきら光り始めました。私たちは、みんな、

「よかったね、よかったね。」

と言い合いました。

しばらくすると、

「あ、かけ始めた。」

と、だれかが言いました。私は、用意してきたいぶしガラスを出して、太陽を見ました。太陽は、草かりがまのようになり、やがて、金のはり金をまげたように、細くなりました。冷たい風がふいてきて、ぞくぞくします。

やがて、黒い太陽は、細い金線の反対側から、ぼうっと、うすい光を出しました。コロナです。金線の両はしは、するするとつながっていって、

指輪のようになりました。息をこらして見ていますと、指輪の左側がちぎれて、コロナだけが残り、右側の金線はどんどん太くなって、次第に三日月のようになっていきました。

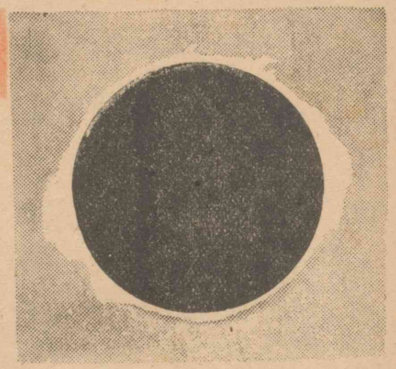
気がつくと、三日月形の太陽の東の方に、金星が光って見え、一時間もあとまで残っていました。あたりは、だんだん明るくなりました。

みんな、ほっとした気持で、だまったまま、目と目を見合わせました。

私の観測記録（北島村小学校の学校通信）

私は、日食時間の三十分前から、いぶしガラスを使って、校庭で観測しました。日食が始まってから終るまでの、私の観測記録は、次の通りです。

十時二十七分三十秒——日食の始まり。天気はよい。



十時五十分——太陽が、右の方からだんだんかけてきて、うす暗くなった。

十一時——空の色が、少しむらさきっぽくなる。林の中は、やや暗くなって、黄色をおびた夕ぐれのようになった。

十一時二十分——高そう気しょう台の飛ばした気球が、目の前を飛んでいった。持っているガラスが冷たく感じられた。からすが、夕ぐれのように、さわぎ始めた。

十一時二十七分——星が一つ、太陽の左側に見えた。

十一時三十分——空の色が、なまり色に見える。学校の中はうす暗くなって、いよいよ、夕ぐれのようになった。

十一時三十五分——太陽のまわりは、はっきりしなかった。

十一時三十八分――第二回の気球が、飛んでいった。
十一時四十分――人の顔が見えないくらい、暗くなった。太陽のうち側に、ぎざぎざができた。
十一時五十分――太陽が、下側の方から、光ってきた。
十一時五十五分――からすが、夜明けの時のような鳴き声を立てながら、さわいだ。
十二時――学校の中が、明るくなった。
十二時三十五分――太陽の左ななめ下の部分に、黒てんが一つ見えた。
十三時十一分三十四秒――日食終り。

三　水道町の学校通信

ちよ子は、学校通信を、東京の小村としえに送った。としえも、ちよ

子と同じように、歌がすきだった。ふたりは、よく、自分で作った歌を見せ合ったものだった。
としえから来た手紙と学校通信は、次の通りである。

ちよ子さん。お手紙と学校通信、どうもありがとうございました。なつかしくてなつかしくて、ほんとうに、なみだが出そうでした。
光村でお世話になったのは、二年足らずのことでしたけれども、あなたや、ほかのお友だちといっしょに勉強したり、遊んだりしていた時のことが、まるで、きのうのことのように、はっきりと思い出されます。
お馬の長子さんも、もう、五つになったのですね。あなたがたといっしょに、お山へ放牧に連れていったことも、なつかしい思い出です。あんなことは、もう、私の一生には、やってこないかも知れません。ふたり

で結んであげたリボンをつけて、くり色のつやつやした長子さんが、私たちを見て、うれしそうに鳴いていた、あの牧場の夏も、わすれることができません。

私たちは、じょうぶに、元気にくらしています。もと住んでいた人たちも、半分以上はもどってきましたので、また、前のお友だちといっしょに、毎日、学校へ行っています。

家はせまくなりましたけれども、庭が広くなったので、手作りの畑が、なかなかりっぱになりました。母も、私も、草花がすきなので、草花の種も、たくさんまきました。それが、もうそろそろ花ざかりになって、かきねの外を通る人たちが、「まあ、きれい。」と言って、ほめてくださいます。

ちよ子さん。私たちの学校通信を、お読みになってください。また、

できたてですから、きたないのですけれど、お友だちにも、見せてあげてください。

母も、光村にお世話になっていたおかげで、すっかりじょうぶになりました。みなさまに、どうぞ、よろしくお伝えください。

小村としえ

秋野ちよ子様

学校建設

（水道町小学校の学校通信より）

ぼくたちの学校は、バラック建てです。まだ、白いペンキのにおいがぷんぷんするほど、新しいのです。おかの上にあるので、晴れた日には、バラック建ての

家々や、緑の麦畑の向こうに、西の山々が、よく見えます。特に、それらの山々の上にきわだって、くっきりとそびえているふじ山のすがたは、なんとも言えない美しさです。ぼくたちは、長野県のおくの、みずうみのほとりに、一年ほど、そかいをしていました。そのころ、よく、学校から見えるふじ山のことを話し合ったものでした。このごろは、毎朝のように、そのふじ山のすがたを見ます。そして、やっぱりいいなあと思います。

学校は、できたてできれいですが、理科の実験用具もなければ、本もありません。体操の道具もなければ、ピアノもありません。音楽も、ピアノなしで、やっているのです。そこで、ぼくたちは、「学級建設」のいちばん初めの仕事として、いろいろな道具をそろえることにしました。

「学級建設」というのは、学年初めの、第一回の自治会で、きめたこと

なのです。ぼくたちは、できるだけ、ぼくたちの力で、やっていこうということを、話し合いました。みんなのほしいものは、そうじ道具、とうしゃばん、本、野球用具、シャベル、けんびきょうなどでした。

ぼくたちは、先生のおゆるしを受けて、めいめいで、おとうさんや、おかあさんに、そのことをお話ししました。そして、おとうさんや、おかあさんに、教室に集まっていただきました。お集まりになった方々にお話しする役には、ぼくが選ばれました。少しはずかしかったけれど、ぼくは、いっしょうけんめいに、話しました。顔がほてって、仕方がありませんでした。それでも、みんな、にこにこしながら、静かに聞いてくださったので、少しもまごつかずに、ゆっくり説明することができました。

そうじ道具は、その明くる日、すぐにそろいました。もうじき、どう

しゃばんも、野球用具もそろいます。

ぼくたちは、ほんとうは、おとうさんや、おかあさんの力を借りないでも、できることはやりたいと思ったのです。けれども、まだ、ぼくたちは小さいので、もっと大きくなってから、やることにしたのです。

ぼくたちは、ぼくたちの教室を、もっともっと、きれいな、楽しい教室にしたいと思います。そして、次に、この教室を使う人たちに、わたしてあげたいと思っています。

4 放牧—ある馬の話

一 牧場へ行く

五月にはいると、山の雪もとけて、青々とした、なだらかな山すそが、目の前に広がっています。

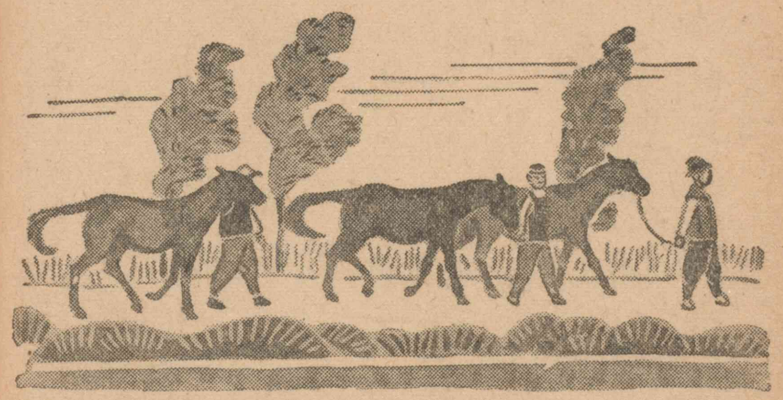
「さあ、きょうから放牧に出るぞ。」

と、ある日、私は、英三さんに口を取られて、組合の放牧場へ出かけることになりました。

私は、英三さんの家に生れて育った二才ごまなのです。

「りっぱなからだになってこいよ。」

と、とうざのお別れに、英三さんの家の人たちから、大豆がらや、ほし草をふるまわれて出かけました。あちらからも、こちらからも、かいぬしに引かれてきた子馬たちが、せまい村の道々で出くわして、長い列を作って、山の放牧場へと向かいました。



放牧場の入口の木戸が、ギーッとあくと、その中に見張り小屋がありました。

その前に集められた二才ごまどうしは、たがいに鼻をつき合わせたり、首をすり寄せたりして、これからなかよくくらそうねと、話し合っています。

「よろしくおたのみしますよ。」

かいぬしたちは、牧手さんに、ていねいにあいさつをして、それから私たちの首をなでて、里へ帰っていきました。

さあ、これから、私たち放牧馬にとって、どんな生活が始まるのでしょうか。まず、馬

に乗った牧手さんにみちびかれて、木のさくにそって、この放牧場のまわりを、ぐるりと一まわりして歩きました。これで、これから共同生活をする、この放牧場のようすが知らせられたのです。牧手さんは、馬に乗りながらも、さくのこわれたところを見つけると、そのたびに下馬しては、手早く直して、また先頭に立って進みます。これは、私たち二才ごまが里こいしくなって、このさくのこわれ目から、わが家へにげ帰ったり、こっそり田畑へぬけ出して、作物をあらしたりしないためなのです。もう一度見張り小屋の前へもどって、そこにある水おけで水をあたえられましたが、ふと気づくと、牧手さんは、いつのまにか、小屋の中へ消えてしまっていました。

今まで家の馬屋で、別々にかわれていた私たちが、急に野外へほうり出されたのです。どうしていいかわかりません。ただ、がやがやと見張

り小屋のわきにかたまっていましたが、やがて日も山のかげにかくれて夕やみがせまってくると、全く、とほうにくれてしまいました。おなかはえんりょなくへってくるし、たまらなくなって、私が、草のよくはえている所を求めて歩き出すと、後から、みんなが、ぞろぞろくっついてきました。初めての夜は、大きい木がしげっている林の下で、草を食べながら、なんだか、そらおそろしくて、みんなでぎっしりとくっつき合ってねむりました。

朝になると、どうして知ったか、私たちのいるところへ、ちゃんと牧手さんが現われて、にこにこしながら塩をくれました。

数十頭の馬が、こうして、一夜のうちに、兄弟のようになかよくなると、一つにかたまって、ぞろぞろと、放牧場の中を、草を追ってあちこち移っていきました。

いつのまにか、広い放牧場の中でも、みんなが歩きまわる道すじも、夜ねるところも、水を飲みにおりる小川の流れもきまり、ふしぎなことには、歩くのも、食べるのも、飲むのも、それぞれ時間が、ちゃんと、きまってきたことです。

草を食べるのも、朝の明け方がいちばん多く、その次は日がくれるころです。この時は、わき目もふらず、バリバリ食べるのです。昼間は、私たちは、いつも何か食べているように見えますが、これは、道草を食っているていどです。それに、草を食べるにしても、私たちは、三分の一ぐらい上の方を食べるだけで、牛のように、草の根もとの、土のところまでしゃぶったりはしません。

それでは、馬はぜいたくな食べ方をするんだねと、おっしゃるでしょうか。牛が一度はいった放牧場を見てごらんなさい。草の根もとまで、

食べあらされて、一時は、それこそ、使いみちになりませんよ。馬でも、同じ放牧場に、長い間、たくさん入れこんでおくと、ひずめで草をふみにじったり、草を食いいためてしまって、来年の使いみちにならなくなります。それで、放牧場の頭数と放牧場の広さとを考え合わせ、一頭あたり、一ヘクタールとか、二ヘクタールとかきめて、一か月か二か月ごとに、別の放牧場へ移しがえをするのです。

二　スクラム組んで

放牧されたときは、ねる家もなく、今までのように、おいしい麦や、大豆、ふすまのかいばをあたえられるではなし、雨や風にさらされて、野天にほうり出されて、草を食べるだけですから、だれもかれもが、いちようにやせていきました。

今まで、あんなにかわいがってくれたくせに、なんてひどいことをするのだろうと、かいぬしの、このしうちをうらんで、あわよくば、さくのこわれ目を見つけだして、里へにげ帰ろうかと、あせるものもありました。けれども、日がたつにつれて、私たち馬にとって、放牧がどれほど大切なことだかが、だんだんわかってきました。

ししは、その子を、生れて三日目に、谷底へつき落して、強く生きる力をあたえるとかいうことです。私たちも、この放牧によって、馬本来の自然に帰って、じょうぶなからだと強い心をやしなうのでした。

もともと、私たちは、野に山に、草と水を求めて、自然にくらしていたのが、人間にかわれて家畜となり、屋根の下に、別々に、すまうようになって、馬どうしの親しさをわすれかけてきました。

となり近所の顔見知りだと、「こんにちは。」とあいさつして、なかよく

遊びますが、知らない馬だと、「なんだい、君なんか。」と、ちょっと手を出してからかったり、けあげたりします。これが、放牧場へ入れられると、おない年のなかまが、みんな家からほうり出されてきたので、さびしさが先にたって、すぐその日から、なかよく団体生活を始めるのです。これこそ、むかしからの私たち馬のほんとうの生活なのです。

そのうちに、いつのまにか、先立ちになる馬ができてきました。この馬が、いつも先頭に立って歩くと、その後からぞろぞろと、なかまが動き始めます。この先立ちになる馬の役を、いつしか私がつとめることになりました。牧手さんは、これをすぐ知って、私の首にすずをつけてくれましたので、私は歩くごとに、ジャラン　ジャランと、すずの音を山中にひびかせて、なかまの先頭に立ったのです。

馬はどちらかといえば、おくびょうな動物ですから、こうして、共同

生活をして、おたがいに身を守るのです。

木かげにねむっているときでも、風通しのよい山のいただきの、馬立場で暑さをしのぐときでも、いつも見張りの馬が出ています。

ちょっと変ったことがあると、ぴんと、聞き耳を立てて、すぐ一同に警戒の知らせを出します。すると、草を食べかけて、口の中でもぐもぐさせていた馬も、いっせいに安全地帯へにげこむのです。

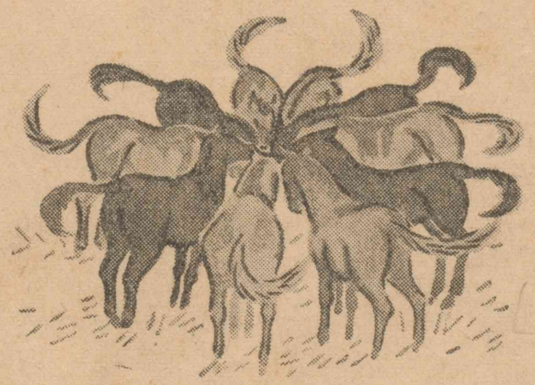
どうして、そんなににげ足が早いのかといえば、私たち馬には、とらやししのように、するどいつめも、きばもありませんし、牛のように、角もありません。にげるより、いたし方がないのです。

それから、雨風とか、きせつはずれのかみなりとかに会うと、実にたくみに、地形や地物を利用して、難をさけます。

くまや、おおかみにおそわれたときにも、もちろんにげの一手ですが、

いよいよせっぱつまると、あのラグビーのように、スクラムを組んで、けあげるという、最後の武器を使うのです。

スクラムといえばあぶやはいがおそいかかっても、この手を使います。みんなで首をくっつけて、まるく輪になって休んでいれば、おたがいに、しっぽをふっているだけで、安全なわけなのです。



こうして、暑い日も、寒い日も、草を求めて移っていくので、放牧場の山坂をのぼったり、くだったり、一日十数キロか二、三十キロも歩くことになります。しぜん運動をほどよく取って、からだをきたえられ、むねはばもがっしりとした、足のじょうぶな馬になるのです。家にいるときは、たまに、田や畑に出ても、平らな所ばかり歩くのですし、毎日ほどよい運動ができませんので、せい高のっぽの、むねはばのせまい、ひょろっとした馬になってしまいます。

放牧の初めこそ、生活が急に変るので、一時はやせもしますが、野天でだんだんきたえられ、高原で太陽の紫外線を受けているうちに、やがて、めきめきじょうぶになること受け合いです。

三　牧手さん

放牧なんて、馬を、野山の広いさくの中へ、たたきこんでおけばよいのだろうと、思われましょうが、どうしてどうして、牧手さんという、おかあさんであり、お医者さんであり、学校の先生でもある人が、十分

に世話をしてくださるのです。

初めの日、木のさくのまわりを、一めぐりしただけで、見張り小屋へはいってしまって、私たちをとほうにくれさせ、心細がらせたのでしたが、実は、あれは、ほんとうは親切心からしてくださったのだということが、じきにわかりました。たいていは、ここへ入れ放しにされるので、いく日もかかって、このさくのまわりをまわってからでないと、落ちついて草を食べることもできないほどです。つまり、石橋をたたいてわたる私たち馬の用心深い性質をよく見ぬいて、わずかニ　三時間のあんないで、安心させてくれたので、そのあとは、自分でやっていけるようになったのです。牧手さんのおかげで、今までの、人まかせの私たちの生活が、だんだん直されていきました。

毎朝、私たちがねむりからさめて、まだ散らばらない前に、牧手さん

は、必ず私たちの集まっているところへ来ては、けん温してくれました。私たちは、これを「朝のおうかがい」と言っていました。こうして、健康状態を調べてみて、もし病気の馬があると、放牧場内の病舎に入れて、手あつくかんびょうしてくれるのでした。

この中には、じゃれたり、すもうをとったりして、なまきずを作っている者もあります。これには、赤チンや、ヨジウムをぬってくれます。フィリー（めすの子馬）は、おてんばですが、コルト（おすの子馬）の方がやんちゃです。追っかけっこをしたり、すもうを取ったりするくらいの、気性の勝った元気者でないと、いい馬になれません。

牧手さんは、昼間は昼間で、私たちの休んでいるところへ来て、つめをけずってくれます。この時も、牧手さんは、足のあげ方を教えてくれます。私たちは、右前とか、左前とか、口で言われただけで、その言わ

れた足をうかして、仕事のしやすいようにします。つめも、二十日に一回ずつくらい、平らにけずってくれます。けつまずいて、なまづめをはがさないように、つま先はかどを立てずに、まるくやすりをかけて、はづめまわしをつけてくれたり、またブラッシュを当てて、からだのよごれや、ふけを取ってくれます。数十頭の馬を、二、三人の牧手さんで受け持って、毎日順ぐりに、こういう手入れや、手当をしてくれるのです。

古くから使っている放牧場には、とりわけ、だにがたくさんいて、草の先に止まっては、私たちの来るのを待ちかまえています。そして、私

たちのかたや、足にたかると、血をすって大きくなり、ぽろりと落ちて地面にたまごをうみつけ、また私たちにたかります。それで、放牧場に火入れをして、草にたかっているだにを焼きころそうとします。すると、だには、土の中にもぐって生き延び、また私たちの足からはいあがって、血をすいます。

私たちも、口先や、つめのとどく所は、かんだり、たたいたり、木の幹にからだをこすりつけたりして、だにをふりはらいます。ところが、だには、ひどいのになると、しっぽのつけ根にまでたかって、私たちの血をたんまりすいます。すえば、頭の何十倍もの大きさに赤くふくれあがって、ときには、いぼかとまちがうぐらい大きくなって、私たちを苦しめます。それで、私たちの中には、ひどくやせて、神経すいじゃくになる者もできるほどですから、牧手さんにむしり取ってもらうと、私た

ちはどんなにうれしいかわかりませんよ。

牧手さんは、こうして、放牧馬のくせを十分のみこんでいますから、水を飲みに下りていく谷川に、広い道をつけたり、川には、せきを作って、水たまりをひろげたりしてくれます。じっさい、私たち馬は、水はうんと飲みますよ。夏なら約三十五リットル、冬でも二十五リットルぐらいは飲みます。ですからむかしから「牛飲馬食」と言いますが、私は「馬飲牛食」と言葉を直していただきたいと思いますよ。

牧手さんは、また、馬立場には、日よけの林をしたてたり、塩なめ台を作ったりして、この放牧場を、せいぜい馬の住みよい楽土にしてくれるのです。

四　楽しい日

こんなふうに、放牧場での生活を話してきますと、家の人は、私たち馬の子どもを牧手さんにあずけっ放しで、知らん顔をしているのかと、思われるでしょうが、そうではありません。

実は、かわるがわる、里からかいぬしがのぼってきては、おみやげをくれるのでした。私たち放牧馬は、毎日へいきん五、六十キログラムの青草を食べますが、その青草の七割は水分ですから、血を清めるためにも、塩とか、みそとか、塩分のあるものをどんなにほしがるか知れません。

かいぬしたちはそれを知っていますから、塩や、みそをべんとうばこにつめてきて、自分の馬にはもちろんのこと、となり近所の馬にもふるまってくれます。これが、その日の特配になるのですから、きょうはどの家の人が来るかと、みんな首を長くして待っているのです。

私の主人の英三さんも、時々、山へのぼってきます。日曜日には、子

どもの英太君や、英吉君まで連れてきてくれます。

そして、「大きくなったなあ。」と、ブラッシュで、毛なみをそろえてくれては、つくづくながめたり、たまさがたかっている、だにも取ってくれます。いつかは英太君をだいて、私のせなかに乗せてくれました。私は、もう、うれしくてたまらないので、急にかけだしますと、おとうさんはおどろいて、

「落ちるじゃないか、おうい、おうい。」

と、後からさけんで、走ってきました。英太君は、たてがみをしっかりつかんで、さるのように、せなかにとまって、「しい、しい。」とはげます。

この小さい乗り手が、少しもこわがっていないのを知ると、私もサービスのつもりで、広い野山を、いっしょうけんめいかけました。すると、友だちの馬の、どれもこれもが、おもしろくなったのでしょう。一かたまりになって、「わっしょ、わっしょ。」と地ひびきを立てて、かけまわりました。この物音におどろいて、何事が起ったのかと牧手さんまでとび出してきて、おとうさんといっしょに、大あわてにあわてて、私たちを追っかけ、とうとう、山を一まわりしてしまいました。英太君は、私のせなかからとびおりて、

「おとうさん、ほんとうにおもしろかった。」

と、にこにこして言いますと、

「びっくりするじゃないか。」

と、おとうさんは、ふうふう息をはいていました。ちょっとすまないような気がしました。

やがて、すすきのほが出、秋の草々も、黄や、むらさきの花をつけ、ふきわたる風もさわやかに、「天高く馬こゆる秋」をむかえるころには、放牧のおかげで、私たちは、からだいっぱい、はち切れそうな元気になって、里へ連れ帰られるのです。

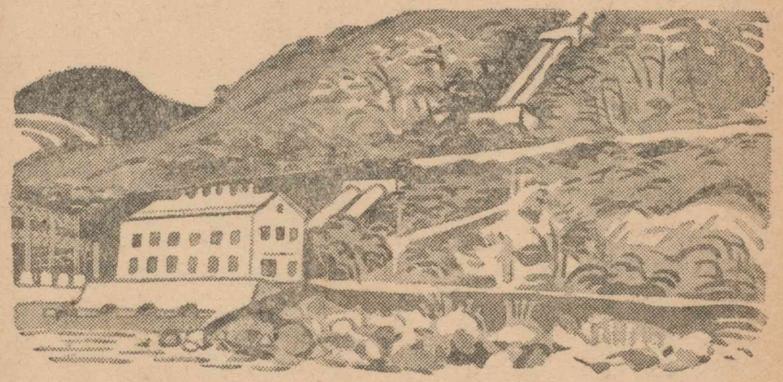
5 発電所

一 すばらしいアイスクリーム

子どもたちが発電所へ招待されたのは、アイスクリームのおかげである。それには、次のような話があった。

上原ひろしが、発電所のできあがったお祝いの日に、すばらしいアイスクリームのごちそうになったという。アイスクリームは、町へ行けば、食べられる。それはおいしいにはおいしいが、そんなにすばらしいものだとは思えない。それが、発電所のアイスクリームは、特別の機械で作った、特別の材料のもので、なんとも言いようのないほど、おいしいのだという。色も、赤や、青などで、見るからに、おいしそうなのだという。

こんなことを問題にするのは、なんだかいやしいようで、みんなもいい気持がしない。ほんとうをいえば、アイスクリームが問題なのではなくて、発電所の方が見たかったのかも知れない。けれども、かんじんのひろしが、きょうは用事があって早く帰ったので、話を聞くわけにはいかないのである。



発電所のできあがったお祝いは、きのうの日曜だった。子どもたちは、そのお祝いに、行きたくて行きたくて、たまらなかった。発電所の工事中には、あぶないので、その近くへ行くことはとめられていた。だから、長い間、遠くからようすを見たり、話を聞いたりするぐらいのことで、しんぼうしなければならなかった。それがいよいよできあがったというのだから、子どもたちは、大さわぎだった。ところが、子どもたちは、だれひとりよんではくれなかった。

あんなにおとなしく待っていたのを知らな

いのだろうか。みんなが、こんなに、発電所のことを考えているのを、まるで、知らないのではないだろうか。

そういう気持でいるところへ、すばらしいアイスクリームの話を聞いた。しかも、ごちそうになったのが、上原ひろしだという。だから、みんなの問題になった。

上原ひろしは、東京の学校から来た。ひろしの父が、発電所の主任になって、東京から移ってきたからである。東京の人は、言葉の調子もちがっているし、なれるまでには、なかなか友だちになりにくい。ところが、上原ひろしは、すばらしい友だちである。学校へ来ると、すぐその日から、みんなの友だちになってしまった。ひろしは、言うことにも、やることにも、全くこだわりがない。からだが大きく、運動はなんでもできるし、第一、自分のものは、少しもおしがらないで、どんどんみん

なに提供する。そういうところは、大いにみんなの気に入っている。
そこでみんなの話は、こういうことになった。ひろしから、発電所の話を聞こう。ついでに、アイスクリームのことも聞こう。そして、できれば、みんなが発電所へ行かれないかどうかも聞こう。
みんなは、そういうことを話し合った。
黒田良三は、初めから、きげんが悪かった。
良三は、ひろしのいい相手だ。良三も、からだが大きいし、運動がすきだ。ひろしが来るまでは、運動では一番の選手だったが、ひろしが来てからは、時々二番になることがある。ひろしにとってはいいきょう敵相手だ。よく、けんかもする。はげしい時には、とっ組み合いをすることもある。もっとも、ふたりのけんかは、ちょっと変っている。みんなの見ている所では、決してやったことがない。だれかが来ると、すぐ、

やめになる。とっ組み合いでも、勝った方から、きっと、
「おい、もうやめよう。」
と言う。その時は、しばらく口もきかないでいるが、明くる日は、もうなかよしになっている。だから、みんなは、ふたりが、そんな、なかよしげんかをするなどということは、あまり知っていないのである。
良三は、みんなが、ひろしのことを話しているのを聞いていると、なんだか、ひろしが、いつものひろしのようではないような、感じがしてならなかった。そこで、
「上原君は、そんな人間じゃないよ。」
と、言ってやりたいような気がしてたまらなかったけれども、みんなは、ひろしのことを別に悪く言っているわけではないから、そんなことは、言い出せなかった。

二　なかよしげんか

良三の家は、ひろしの家に近い。そこで、良三は、帰りに、ひろしに会おうと思った。

ところが、ひろしの家の近くまで来ると、だんだん、みんなの話がつまらなくなってきた。

「アイスクリームだなんて。」

と、良三は考えた。

「ばからしくて、そんなこと聞けやしない。第一、上原君が食べたっていいじゃないか。それを得意になって話すような上原君じゃない

さ。」

良三は、しきりに、ひろしのかたを持つようなことを考えていた。そうすると、ひろしのいいところだけが、考えられてきて、ますます、ひろしがすきでたまらなくなった。

ひろしは家にいた。

ふたりは、やがて、連れ立って、いつも、遊んだり、ころげまわったりする草原へ来た。

「用ってなんだい。黒田君。」

ひろしは、立ちどまって、にこにこわらった。

「君は、発電所のお祝いに行ったろう。」

「ああ、行った。」

「おもしろかっただろう。」
「おもしろかったよ。」
「なぜ、そのことを、みんなに話さないんだ。」
「なぜって——。なぜでもないさ。」
「アイスクリーム食べたろう。」
「うわあ、よく知ってるなあ。だれから聞いたんだい。」
「青いのや、赤いのや、いろんなアイスクリームだろう。」
そう言った時、良三は、実は、おなかのなかでおかしくなったが、わざと、こわい顔をした。
「じょうだんじゃないよ。アイスクリームはうす黄いろいんだぜ、君。青いアイスクリームだなんて。」
「でも、君は、アイスクリームのことも話さなかったぞ。」

「そりゃあ、話したくなかったからさ。」
「なぜ、話したくないんだ。それを聞いたら、ぼくたちがうらやましがるとでも言うのかい。」
「どうだか、そんなこと知るもんか。ぼくは話したくないだけなんだ。」
「みんな、君から聞きたがってるんだぞ。」
「聞きたがったって、話すもんか。」
それから、ふたりは、とっ組み合いになった。
ここで、ちょっと、説明しておこう。ひろしは、父に、みんなを発電所へよんでくれるようにたのんだ。父は、そうするつもりだと言った。ひろしが、そのことを良三に話さなかったのは、なんだか、良三に言われてからだと負けるような気がしたからだ。
ひろしは、自分だけが発電所へよばれて、いいことをしたようで、気

持が悪かった。また良三は、すきなひろしを、そんな人間だと思うのが、いやだった。ふたりは、おたがいの、そんないやな気持を、とっ組み合いで、ふっ飛ばしてしまうのだ。

ふたりのからだは、まるで、くまの子のように、上になったり下になったりして、やわらかな草の上をころげまわった。

「おい、おい。ふたりとも、どうしたんだね。もうそろそろやめたらどうかね。」

ふたりの耳に、だしぬけに、太いおとなの声が聞えた。それは、おまわりさんの木村さんだった。木村さんは、自転車をとめて、少し前から、ふたりのようすを見ていたのだ。

ふたりは、はあはあ、息をはきながら立ちあがった。

「ふたりとも、元気があるのはいいが、あまり元気すぎるといけないぞ。

もっとも、わしの子どものころは、そんなものじゃなかったが。」

木村さんはそう言って、

「わはははは。」

と、大きな声でわらうと、すぐ、自転車に乗って、行ってしまった。ふたりは、なんだか、きまりが悪くなった。

ひろしは、良三のカバンを草の上から取って、良三の手にわたした。

三　子どもの花たば

それからまもなく、こどもたちは、発電所へ招待された。人数が多いので、三回に分けて、行くことになった。五年生は、第二回だった。

発電所は、早川を約六キロほどさかのぼったところの、東側にある。川にそって、トラックの通るりっぱな道ができていたから、みんなの足

は早かった、一時間ばかりたつと、もう、発電所の、うす青い建物が、道の下のところに見えた。

そこに、発電所の人が、三人立って、みんなを出むかえていた。その中のひとりは、ひげをはやした、りっぱな人だ。

「やあ、上原君のおとうさんだ。」

それを見ると、みんなは、わあわあさわいだ。

ひろしの父は、道のかたわらの、少し高い所に立って、あいさつをした。

「みなさん、きょうは、そろって、よく来てくださいました。この、光村発電所は、いろいろな困難とたたかって、ようやく、完成いたしました。村の方々の、心からのお力ぞえがなかったならば、こんなに早く、こんなにりっぱにできあがることは、とうていできなかったでしょう。私たち発電所の者は、ほんとうに、ありがたく思っています。電気が、どんなに私たちの生活にとって大切なものか、また、それについてどんなことを知っていなければならないか、それは、みなさんが今まで勉強し、また、これからも勉強していかれることですから、今、ここで言う必要はないと思います。これから、ゆっくりいろいろな施設をごらんになって、みなさんのわかるだけのことはわかっていただきたいと思います。それから、ちょっとおことわりしておきますが、発電所の者は、みんな、あなたがたとなかよくなることを望んでいます。えんりょしてはいけません。わからない事があったら、どんどん聞いてください。そのつもりで、私たちはお待ちしていたのですから。きょうは、ゆっくり一日をすごしてくださるように、お願いいたします。」

ひろしの父が頭を下げて、道へおりようとすると、さち子とちよ子が出ていった。ふたりの手には、大きな花たばがささげられていた。

「きょうは、私たちを、よんでくださいまして、ありがとうございました。」

と、ちよ子が言った。

「これは、私たちの作った花でございます。私たちのお祝いの心として、どうぞお受け取りください。」

「やあ、これは。」

ひろしの父は、びっくりして、その花たばを受け取った。

「なんという、きれいな花でしょう。

ありがとう、ありがとう。」

そして、赤いダリヤや、白いマーガレットなどの花に、顔を近づけた。

「ほんとうに、何よりのおくりものです。」

みんなは、いっせいに手をたたいた。

四　貯水池

貯水池を先に見ることになったので、みんなは、道から、すぐ右側の急な細道をのぼった。おべんとうの包みは、発電所の人があずかって、事務所の方へ運んでくれた。

のぼり切った所は、しば原で、すぐ向こうに、土手があった。そこもいちめんのしばふだった。その向こうに、貯水池があるのだ。みんな、わあっと声をあげながら、土手にのぼった。

実は、きのう、みんなでいろいろなことを相談した。
質問は、めいめいが勝手にしないで、なるべく、まとめてすること。
発電所では、必ず発電所の人の指図にしたがうこと。
できるだけ、ばらばらにならないこと。
紙くずを散らさないこと。
仕事をしている所では、ぜったいにむだ口をきかないこと。
そういうことを話し合った。けれども、こんな気持のいい所へ来ると、どうしても、みんな、じっとしていられなくなる。
「わっ、きれいな池だなあ。」
「ずいぶん、広いんだなあ。」
「深そうだねえ。どのくらいあるんだろう。」
土手の上に立って、みんなは、口々にそんなことを言った。

池の水は、今までに見たどんな水よりも青いように見えた。時々風がふいてきて、池の上にさざ波を立て、みんなのほてった顔をなでていった。池の岸は、青い草の土手で囲まれていて、その向こうには、森があった。森の上には、遠い山々が見えた。
「この池は、もとからあったものを広くして、発電所で利用することにしたものです。周囲は約六キロ、水の深さは六メートルで、貯水量は、約八百万立方メートルあります。」
発電所の、中村さんというわかい人が、みんなを集めて、こう説明した。

「早川からの水の取り入れ口は、あの、小さなまつの木の見えるかげの所にあります。そして、ここの水は、右の方に見える、あの水門の所から、水そうにみちびかれ、そこからさらに、二本の鉄管で、発電所の方へ落すのです。さっき、みなさんの見た管がそれです。」

「川から、ごみなどが、はいってきてもいいんですか。」

太郎が、たずねた。

「もちろん、いけません。ですから、取り入れ口の水門の所に鉄ごうしをしかけて、ごみがはいってこないようにしてあるのです。」

「水が少くなることはありませんか。」

「ありますね、冬になって、雨がふらないようになると。そうすると、発電機で起す電気の量も少くなりますから、電気を使う上に、いろいろ不便なことができてくるのです。ですから、発電所を作る場所をき

めるときには、川の流水の量とか、そのあたりにふる雨の量とかもよく調べてから、きめるのです。」

中村さんの話によると、だんだん魚もふやすようにするし、ボートなども備えつけるようにするとのことだった。

太郎と東一は、中村さんにことわって、運動ぐつをぬいで水にはいった。山の水のように冷たかった。それを見ると、あとからあとから、みんなが水にはいってきた。

みんなのかげが、ゆらゆらと水の底にゆれた。

五　エレベーター

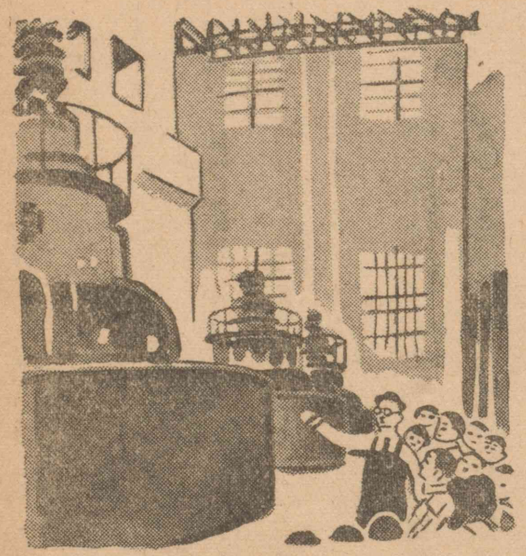
発電所の建物は、道からずっと低い所にあって、そこまで、石だんが百メートルばかりつづいている。みんな、池のところで、いい加減遊ん

だので、少しくたびれたようだった。

建物は二階建てで、コンクリート作りである。まだできたてだから、うす青色のかべが、くっきりと光っている。その建物の前の所に集まって、みんなは発電所の人の話を聞いた。中へ入ると、仕事のじゃまになったり、機械の音がやかましいからだと言う。

その話は、大体次の通りである。

今みんなが見てきた池の水が、電気を起すのに、大切な役目をする。あの貯水池は、もともと池であったのを、発電所で利用したので、今は、川の水を取り入れるようにしたのである。池の水は水そうにみちびかれ、そこから百三十メートル下の、発電所の中に備えつけてある水車を動かす。この水そうから発電所までは太い鉄管で、一秒間に、十六立方メートルの水を送りこむ。



この発電所は地上が二階、地下が三階ある。

水車は、この発電所の地下の三階にある。これは、一分間に、四百五十回転する。この発電機によって起される電気の強さ（電圧）は、一万一千ボルト、電力は、一万七千キロワットである。

配電盤室では、水を入れたり、とめたり、水車の回転の速さを、加減したりする。電気を送り出したりとめたりするのも、ここである。したがって、いろいろな計器が、ここに備えられている。

室外の変圧器に送られた電気は、十五万四千ボルトという高い電圧

にあげられて、東京へ送られる。もちろん、この近くへ送る電気は、別の変圧器によって送られる。

こういう話を聞いてから、みんなが、三組に分れて見学することになった。太郎たちは一組で、初め、事務室から配電盤室にはいった。何から何まで新しいので、まぶしいくらいである。ガラスまどは大きくて、向こうに、このあたりの見なれない森や空などが、くっきりと見えている。それも、なんだかめずらしいもののように見える。機械のにおいか、ぬってあるもののにおいかわからないが、室にただよっているにおいも、みんなには、いかにも、新しい世界へ来たのだという感じをあたえる。

初めに話を聞いていたので、機械のようすなど、たいてい、よくわかった。けれども、話の中で一つぬけていたことがある。

室のすみに、町の交番ぐらいな大きさのものがあった。良三が、その

前へ来た時、なんの気なしに、

「これは、なんだい。」

と、ひろしにたずねた。

「エレベーターさ。」

ひろしの答えは、こうだった。

「ああ、エレベーターか。じゃ、君、下へ行くのに、乗っていけるんだろう。」

「行けるよ。」

乗ろうよ。君、乗せてもらおうよ。」

と、良三が、しきりに言う。そこで、ひろしが代表になってたのむと、中村さんは、

「さあ、こまったな。これは、みんな乗るわけにいかないし。」

と、こまったような顔をした。
「みんなでなくってもいいんです。歩いていく者は、歩いていけば。」
それを聞きつけると、みんな、しょうちをしない。
「エレベーターだってさ。じゃ、ぼくも乗っていく。」
「わたしたちも、あとからでいいから、乗せていただくわ。」
「じゃ、順番になろう。」
すぐに、列ができあがった。中村さんは、こまった。
「そんな、列を作ったって、こまるなあ。みんな乗っていくと、時間がかかりますよ。」
「いいんです。」
と、元気よく言う。
エレベーターには、六人乗る。太郎は、良三やひろしといっしょだっ

た。動き出すと、なんだか、暗いやみの下の方へ引きこまれるような変な気分になる。足の下が、ちょっとはなれるような気がする。ちらっちらっと、とちゅうで明るい所が見えたと思うと、あっと言う間に下へ着いてしまった。なんだか、少し、あっけなかった。
それから、今度は歩いて、順々に上へ上っていった。どのへやも、ゴーゴーと重苦しい音がして、頭をおさえつけられるようだった。配電盤のところから外へ出ると、みんな、ほっとした。せのびがしたいようだった。
そこには、大きな変圧器があって、そこから、何本も、何本も、太い電線が出ていた。山の方へ行っているもの、川にそって行っているもの、川をわたって向こう側へ行っているものと、三つの方向にわかれている。
「あれが、東京へ電気を送る線です。」

と、中村さんが指したのは、川にそっている電線だった。
みんなは、それを見あげた。晴れた夏の空を見あげながら、みんなは、目を細めた。

六　新しい生活

おべんどうは、草原で食べることになった。
あっちでもこっちでも、すばらしかったという話が始まった。聞いてみると、エレベーターには、みんなが乗っていた。二組と三組とは、エレベーターに乗って上ってきたので、どうも、その方が、気持がよかったらしい。
「もういっぺん、見たいね。」
と、太郎が言った。

「ぼくは、電気のことを勉強するときに、また、見せてもらう。」
と、良三がいった。
「ぼくは、およぎに来る。この水はつめたいから、きっと、気持がいいぜ。」
と、ひろしが言った。
「幸助じいさんに、いいつり場ができたって話してあげなくっちゃね。」
と、東一が、いたずらそうにわらった。
食べ終ると、四人は、言い合わせたように、ごろりと、あお向けになった。どこまで行ってもはてしのない青空が、ひろがっている。
「上原君。」
と、太郎が言った。
「君、電気機関車のもけいを作るって、言ってただろう。」

「うん。」
「あれ、できたの。」
「できるもんか。まだ、材料も、すっかり整わないんだ。」
「じゃ、作るとき、ぼくにも手伝わせてくれないか。」
「ああ、いいとも、そのつもりでいたんだ。」
「上原君は、電気の技師になるんだろう。」
と、その時、良三が言った。
「どうして。おとうさんが電気の技師だからかい。」
「そうさ。君のおとうさんは、えらいんだってねえ。うちのおとうさんが、そう言ってたよ。」

「そうかい。ぼくのおとうさんはね、君のおとうさんの方が、えらいんだって言ってたよ。」
「そうかい。」
良三は、うれしく思った。
子どもたちには、新しい発電所の生き生きした感じが、すばらしく気持がよかった。そこで働いている人たちも、生き生きした、気持のいい人たちばかりである。はきはきした言葉使い、きびきびした動作――発電所のそういう感じは、いかにも、じかに東京へつながっているように思われてならない。村の静かな生活の中からやってきて、何時間かいただけだけれども、子どもたちは、つかれていた。なんだか、からだをすっかりゆすぶられたような感じだった。

良三がひろしに向かって、「君のおとうさんはえらい。」と言ったその気持は、太郎も同じだった。世の中のためにつくした科学者たちの話を聞くたびに、太郎の心はおどった。そして、すぐに、東京のことが考えられてならなかった。それは、決して、光村の生活がいやだとか、古くさいとかいうこととは別だった。もし、今、すぐ東京へ出て勉強をするように言われても、太郎は、そうはしなかっただろう。なぜなら、光村の人々は、太郎をこの上もなく大切にしてくれるし、太郎も、村の人々をこの上もなく大切に思っているのだから。けれども、きょうのような時には、太郎の心も、もっとすばらしい、もっと生き生きした世界に向かって、動かずにはいられない。良三も、きっと、そうなのだ。

うの花の、

におうかきねに、
ほととぎす、
はやも来鳴きて、
しのびねもらす、
夏は来ぬ。
……
……

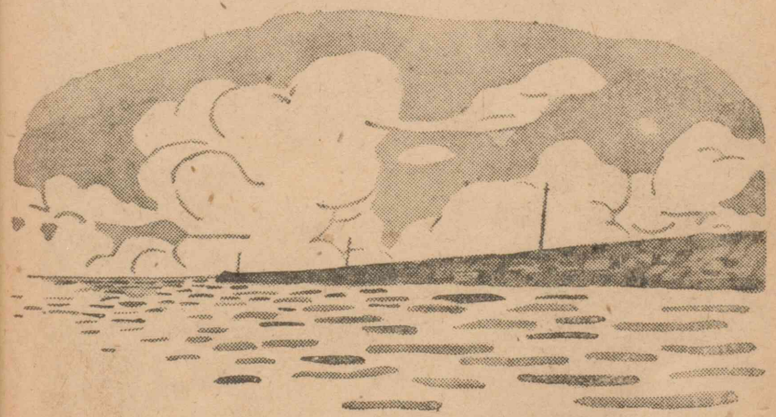
女の子たちの合唱が、聞えてくる。目をあけると、あいかわらず、日光は、きらきらと、ふるようにまぶしかった。

6

子どもの海

一　突堤

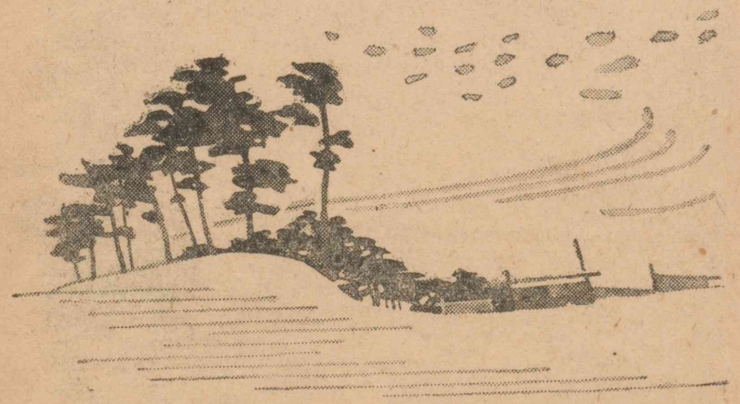
突堤の、
いちばん先だよ。
あすこには、
だれか、待ってる、
きっと、待ってる。
ああ、
あの、細い突堤の、
いちばん先だよ。



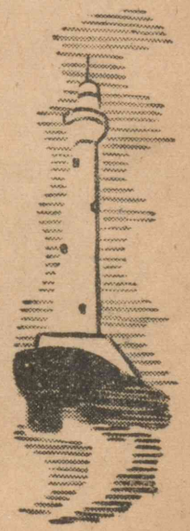
二　燈台

燈台は、村からはなれている。
青いまつ林の、向こうにある。
かわいた赤土のみさきにある。

そこには、
光をまもる人々が、はたらいている。
そこには、
心のやさしい人々が、集まっている。
そこには、
なかのいい人々が、くらしている。



燈台は、風にふかれている。
白く、白くかがやいている。
静かに、今はねむっている——。



三・新しい船

山田さんのところで作った、新しい船。
横っぱらがねずみ色、ねずみ色の上にかき色のすじ、
きのうぬったばかりのペンキが、まだ強くにおう。
船長室も、かき色の二階作りだ。
ほばしらは、かきに白色。
機関長室も、コックべやも、船長室と同じ色だ。
夏の太陽に、きらきら光るはた。

風にふかれて、バタバタと音を立てるはた。
これが、うちの船だと思うと、いても立ってもいられない。
この船で、よく、いわしが取れるならと思う。
いわしを取ってきて、はたを何本も立てている船のすがたが、
目の前に、はっきりうかんでくる。
わたしは、あまりうれしくて、
おどったり、はねたりしたいようだ。

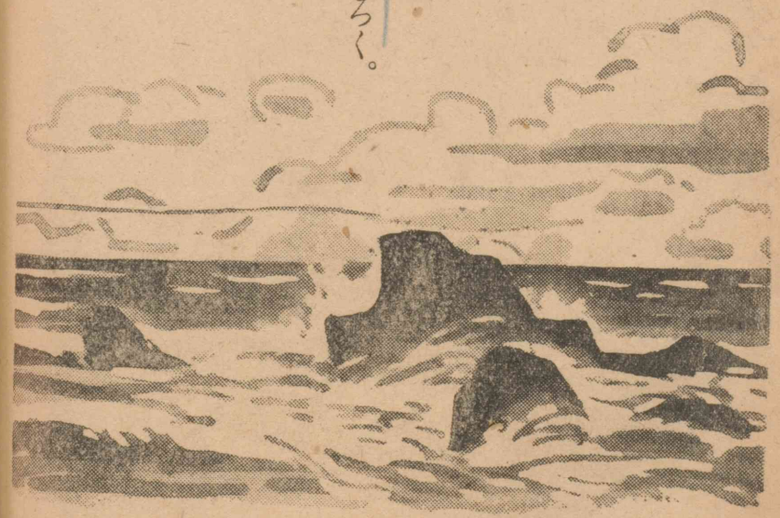
四　ぼくたちは答える

ぼくたちは答える、
海へ行きますと。

ぼくたちは答える、
船に乗りますと。

海は、ぼくたちを取りまき、
海は、ぼくたちの向こうにある。
黒潮は、ぼくたちをよび、
海鳴りは、ぼくたちのむねにとどろく。

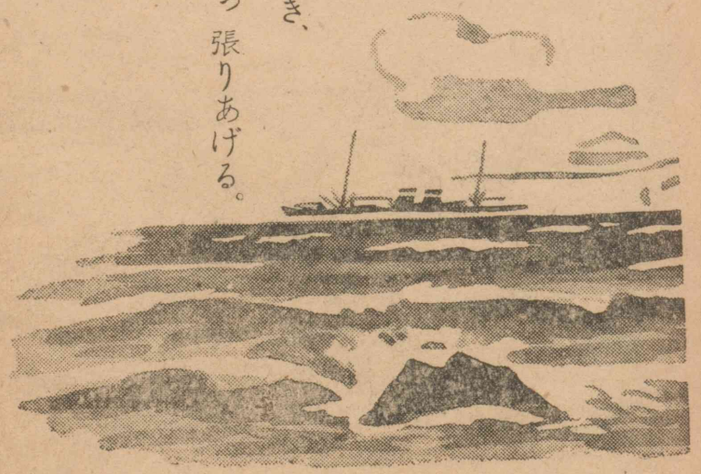
もりあがる波をくぐり、
ぼくたちは、真青な海へ出る。
夏の太陽をあびながら、
ぼくたちは、みんな考える——



ぼくは、試験船に乗る。
水温をはかり、プランクトンを調べ、
魚群を追って、海流と共に走る。

ぼくは、まぐろをつる。
夜明けの、暗い水面に、いわしをまき、
力を合わせて、びんながまぐろを引っ張りあげる。

ぼくは、汽船に乗る。
安らかに、楽しく、海をこえる。
世界の人々がゆききし、世界の物がゆきかうために——



風は、すなをふきあげ、ぼくたちの顔にふきつけ、
太陽は、すなにかがやき、ぼくたちの顔をてらす。
黒潮は、ぼくたちをよび、
海鳴りは、ぼくたちのむねにとどろく。

ぼくたちは、海に向かって答える、
ぼくたちは、あなたのこどもですと。
ぼくたちは、そろって答える、
今に、あなたのところへ行くのですと。

7

北極探険

一　ノルドマルカの森

シュトレ・フレーンの農場は、子どもたちにとって、楽しい場所であった。緑と白でぬったかきねの中には、大きな、気持のいい建物があり、青々とした広い畑があった。また、そこには、馬や、め牛や、がちょうや、にわとりがいた。そこからは、遠く、森や、山や、切りたった岸に深く入りこんでいる入江が見えた。近くには、あめますのいる川が流れていた。そして、農場のすぐ後には、ノルドマルカの森があった。こういう所で、少年は、すくすくと育っていった。

ある時は、冬の夜のいろりのほとりで、ロビンソン・クルーソーや、アスビョルンセンのおとぎ話を読みふけった。また、ある時は、まくり

あげたズボンのすそに、えさにする虫を入れて、はだしのまま、こおった川で、つりをした。つりばりを上くちびるに引っかけ、びっくりした母親が、それを切って、取り出してやったことなどもあった。そういう時、少年は、少し青ざめた顔はしていたが、決してないたりしたことはなかった。

少年は、何か仕事にかかると、そのことにだけ熱中した。ある時 家政婦が金切声をあげて、台所からとび出してきた。荷車のそばで、ぼうぼうともえているもの

のがある。それは、少年の上着だった。少年は、荷車によりかかって、金づちで、車輪を打っていた。家政婦は、少年の上着をはぎ取り、地面へそれを投げつけて消しとめた。少年は、おかげで、やけどもしないですんだ。けれども、少年は、上着をはぎ取られても、まだ、車輪を打ちつづけていたのだった。

ある時、長い小包みが、少年にとどけられた。

それをあけた少年は、喜びの声をあげた。スキーだった。黒いすじが何本もはいっている、赤ぬりのスキー、青ぬりのつえと輪——それこそ、なかよしの、いんさつ屋のおじさんが、少年の使っている、手作りのそまつなスキーを見て、わざわざ送ってくれた、美しいおくりものだった。

少年は、この美しいスキーを、十年間使った。

十七才の時、少年は、ノルウェーのスケート選手けんを取り、十八才

でスピードスケートの世界記録をやぶった。けれども、少年が、何よりもすきなのは、スキーだったのだ。

すぐ近くのノルドマルカの森は、少年たちを、いつも招いてくれた。十二才になったときから、少年は、その森のおく深くはいることをゆるされていた。そのころは、この森を通る者はあまりなかったので、何週間も前のスキーのあとが、そのまま雪の上に残っていることも多かった。

ノルドマルカの森は、静かであった。鳥の声も、風の音もなく、空気は、実にすんでいた。真青に晴れた、まぶしい空の中には、雪をかぶった遠い山々が、くっきりと見えていた。

松の香のただよう空気の中、ふんわりと雪の積った木々の間をぬって、ひとりの、たくましい少年は、だまってスキーをすべらせていた。少年は、深いもの思いにふけっていた。この、荘厳な松の森は、少年の一生

を通じて、その心にきざみつけられたのである。

二　少年フリチョフ

少年フリチョフ・ナンセンは、一八六一年十月十日、ノルウェーの首都クリスチャニヤ（今のオスロー）の上につらなる西アーケルのおか、シュトレ・フレーンの農家に生れた。

せいが高く、ほね組ががっしりしていて、その青い目は、ひじょうにはっきりしていた。また、スポーツがすきなことや、自分でいちばんいいと思うことをやる勇気や、それを他人がどう考えるかなどということは、全く考えないのんきな性質なども、母親のアデライデ・ナンセンからうけついでいた。けれども、年を取るにつれて、次第に父親に似た性質を見せるようになった。おだやかな動作、他人に対する思いやり、仕

亨に対しては、注意深くてきちょうめんなこと、こうと思いこんだら決して動かない性質などがそれである。父親のバルゾル・ナンセンは、法りつ家で、おだやかな、しっかりした人であった。

三　ヴィキング号

フリチョフは、やがて高等学校を卒業して、クリスチャニヤ大学に入学した。大学生のフリチョフはせいが高く、がっしりしていて、動作はきびきびしていた。どんなに寒い日でも、めったにオーバーを着なかった。色の白いフリチョフの顔は、すぐ日に焼けて、まゆとまゆの間や、目のまわりにすじが出来た。フリチョフは、りっぱなスポーツマンだったが、同時に、自然や、音楽や、詩の美しさを愛する、やさしい心を持っていた。フリチョフは、また、心から家庭を愛し、友だちを愛した。

フリチョフがせん門の学問として選んだのは、動物学であった。ほんとうは、物理学か数学の方がすきだったが、動物学の方が、きっと、戸外生活を多くさせてくれるだろうと思ったからだった。これは、たしかにその通りになった。

一八八二年三月十二日、フリチョフは、あざらしがりの船ヴィキング号に乗せてもらって、北極圏の流氷群の中へ出かけていった。

この航海のときに、ナンセンは初めて日記をつけ、ほとんど一生の間それをつづけた。また、初めて、広大な北極圏の流氷群を見たし、氷のきしむ音を聞いたし、氷原が、その上方に反射するのを見た。

この航海で、ナンセンの発見した二つのものがあった。一つは、氷の上にこおりついている材木だった。それは、松の一種であった。——一体、これは、北アメリカの海岸からただよってきたものだろうか。潮

流が、材木を北へ運ぶことはあるかも知れないが、それを氷の上へよじのぼらせるということは、ありそうにもないことである。ノルウェーには松があるが、海岸には氷が張らない。また、グリーンランド、アイスランド、シュピッツベルゲンなどでは、海岸の近くに氷が張るが、そこには木がない。この材木は、氷がすぐ近くでできるような海岸から来たにちがいない。そういう海岸のあるのは、シベリヤだけである。そうすると、どういう潮流が、その材木を、シベリヤからグリーンランドおきの流氷群の中まで、持ってきたのだろうか。北極地帯の流氷群が、東から西へ移動したのだろうか。北は、どの辺まで、ただよっていったのであろう。

もう一つは、ごみであった。流氷の上に乗っていた、細かいごみであった。また、氷のとけかかった所には、少しばかりのどろとねん土があ

った。ナンセンは、自分よりもっと経験の深い人に見せるために、それを持ち帰った。

フリチョフ・ナンセンがこの航海をしたころは、海流については、なんにも知られていないといってもいい状態であった。ことに、北極地帯の海流については知られていなかった。あたたかい海流が、ノルウェーの海岸にそって流れているために、その海岸には氷が張らず、その地方があたたかいのだということは、だれでも知っていた。けれども、それからこの潮流が、どこへ行くかということは、だれも知らなかった。わかっていることは、極地の潮流が北方から下ってきて、グリーンランドや、シュピッツベルゲンを、氷でとざしてしまうということであった。けれども、それは、一体どこから始まるのだろうか。どういう道すじを進むのだろうか。これらの潮流は、長い間変らずに流れつづけているの

だが、何がそれを動かしているのだろうか。地じくを中心とする、地球の回転だろうか。風だろうか。地球上の場所が変るので、それにつれて、温度が変ってくるのだろうか。——

ナンセンは、これらの問題のいくつかは、自分でかいけつした。他のものは、今もなお、世界中の科学者たちによって、かいけつされつつある。それらの科学者たちは、今もなお、ナンセンの集めた事実、発明した器具、たどりついた考えなどを、自分たちの仕事のよりどころとしているのである。

六月おそく、ヴィキング号は、グリーンラ

ンドの東海岸近くで、氷にとじこめられた。船は、氷とともに海岸にそって、南へ流されていた。この三週間は、北極ぐまがりに、最もいい機会だった。ナンセンは、氷をわたり、氷のおかに身をかくし、こおった氷たまりにはらばいになったりして、めざましいりょうをした。ナンセンは、こうして、大きな白い北極ぐまを十四ひきもしとめた。

この航海は、数か月にすぎなかった。けれども、家をはなれて、全く新しい世界で送られたこの数か月は、ナンセンを、ひとりの、りっぱな男にしたてたのであった。

四　グリーンランド横断

大学を出ると、ナンセンは、ノルウェーの西海岸にあるベルゲンの博物館につとめることになった。ナンセンは、六年近くも、そこにいた。

やがて、動物学者としてのナンセンは、世界中の科学者たちの間にも、名前を知られるようになり、いろいろな地位が提供された。しかし、ナンセンは、そのどれにも、進んでいこうとはしなかった。

ナンセンは、いそがしい日々の間にも、グリーンランドのかがやく峰や、その向こうに横たわる、未知の土地をわすれることはできなかった。そして、一八八七年、父のバルヅルが死んでから——ナンセンは、からだの弱っている父に心配をかけるのをおそれて、それまでは、きけんな旅行に出かけるのをひかえていた——まもなく、グリーンランド横断旅行のじゅん備を始めた。そして、それは、その明くる年の夏、五人の人々と共に、決行された。

この人々は、言葉には言いつくせないほどの、つらい苦しいことに出あった。けれども、この人々の精神はあくまでも勇敢で、その身体は強

健そのものであった。初めにナンセンの考えをばかにしてわらった人々までが、その成功を祝わずにはいられなかった。ばかげたむだ使い、わかいノルウェー人の遊び半分の旅行と、悪口を言われたこのくわだては、決して、そうではなかった。

勇敢な精神とゆめとを持った一青年は、多くの他の者が試みて失敗したところに、偉大な成功をおさめたのである。

五　氷上の木とごみ

ヴィキング号の航海で、ナンセンは多くのうたがいを持った。これらのうたがいの一つは、かいけつした。グリーンランドの、海岸ぞいの山の後に何があるかを、ナンセンは、自分で見てきた。けれども、そのほかのうたがいは、まだ残っていた。どうして、シベリヤからの材木が、

グリーンランドの岸にただよい着いたか。また、とけかかった氷の上のねん土の中には、何があるのだろうか。ある科学者は、その中に、こけや、海草を発見した。それらは、ベーリング海峡に近い、シベリヤの海岸だけにしか生育しないものであった。

もう一つ、ジャンネット号問題ということがあった。一八七九年の秋、アメリカの探険船ジャンネット号が、北極への新しい進路をさがしながら、ベーリング海峡へ来たとき、氷につかまり、二年近くもただよった後、北氷洋でちんぼつした。それから三年後、グリーンランドの海岸でひとりのエスキモーが、たしかにジャンネット号のものと思われる防水ズボン、貯蔵品目録、ボートの目録などを発見した。

――これらの物は、氷に乗って、シベリヤから北へ向けて極地へ運ばれ、それから南へ向かって、グリーンランドの海岸へ運ばれたにちがい

ない。もし、氷夫の防水ズボンが、氷に乗って北氷洋をこえられるというならば、他の物にもこえられないはずはない。たとえば、氷のつぶすことができないような、強さと形とを持った船が作られたとしたら。もし、その船が流氷群の中にこおりついて、シベリヤ海岸から北へ進むことができたならば、潮流が、氷と共に、船を北氷洋中へ運んでいき、それからふたたび南方へ進んで、シュピッツベルゲンとグリーンランドの間の氷面へ運んでくるのではないだろうか――

ナンセンは、こういう話を、いろいろな集まりの時に話した。地理学者や、探険家たちは、ナンセンのしんけんさや、強い人格にひきつけられはしたが、その考え方は、なかなか信用しなかった。けれども、ノルウェーは、今や、ナンセンを信用した。ノルウェー人により、ノルウェーの船によって行われる、このくわだてのために、十万ドル以上の金が

集まった。

ナンセンは、初めから、北極へじっさいに行き着くということよりも、むしろ、北氷洋について、その深さ、潮流の運動、風の方向、氷中の魚の種類などを学ぶことが重要であると主張していた。ノルウェーの人々は、そのみいりの大部分を、魚取りやあざらしがりや、ぼうえきによって、海洋から得ているのである。ノルウェーの人々は、海洋についてもっと学ばなければならない——ナンセンは、こう考えたのである。

六　フラム号

次の三年間は、航海のじゅん備に使われた。最もむずかしいのは、船をどのように作るかということであった。できあがってみると、それは、美しい船ではなかった。船体は短くて、横はばが広く、全体の形が、ま

るっこかった。氷の圧力が加われば自然に持ちあがって、氷の圧力を下の方へそらし、ついには、氷の上に静止するというようになっていた。どの方向に対しても、圧力に負けないように、じょうぶな材木で船ばたがささえられた。その船ばたは、かしの板と松の板で、五重に張ってあった。温度をたもつためには、内側のかべがフェルトでうら打ちされ、キルクのゆかには、リノリウムがしかれた。

乗組員のへやは船の真中にあり、ねべやはその周囲にあった。どのへやのかべも、長い冬の間、明るい気持ですごせるように、つやつやした白い色でぬられた。ひまつぶしのためには、千さつの本を備えた図書館と、遊びごとの道具や、楽器の設備があった。電燈もあった。それは、船のエンジンか風車によって、発電された。八台のボート、いくつかのそり、それを引くいく組かのエスキモー犬がいた。それは、何か船にま

ちがいの起ったときに、氷からでも、氷の張っていない水面からでも、にげ出せるための用意であった。

ナンセンは、この旅行が、二年か三年はつづくだろうと考えたが、しかし、食物や着物は、六年分の用意をし、油は、八年分の用意をした。

七　北極へ

一八九三年六月の末の、ある雨のふる日、フラム号は、クリスチャニヤの港を出て、西へ向かっていった。「フラム」とは、ノルウェー語で、「前進」という意味である。わずか十三人のノルウェー人を乗せたフラム号は、ノルウェーの南の海岸にそって、のろのろと進んでいった。ベルゲンから北は、天気がおだやかだった。フラム号が、岸と島々との間を進んでいくと、どの町からも、人々をこぼれるように乗せたボートが

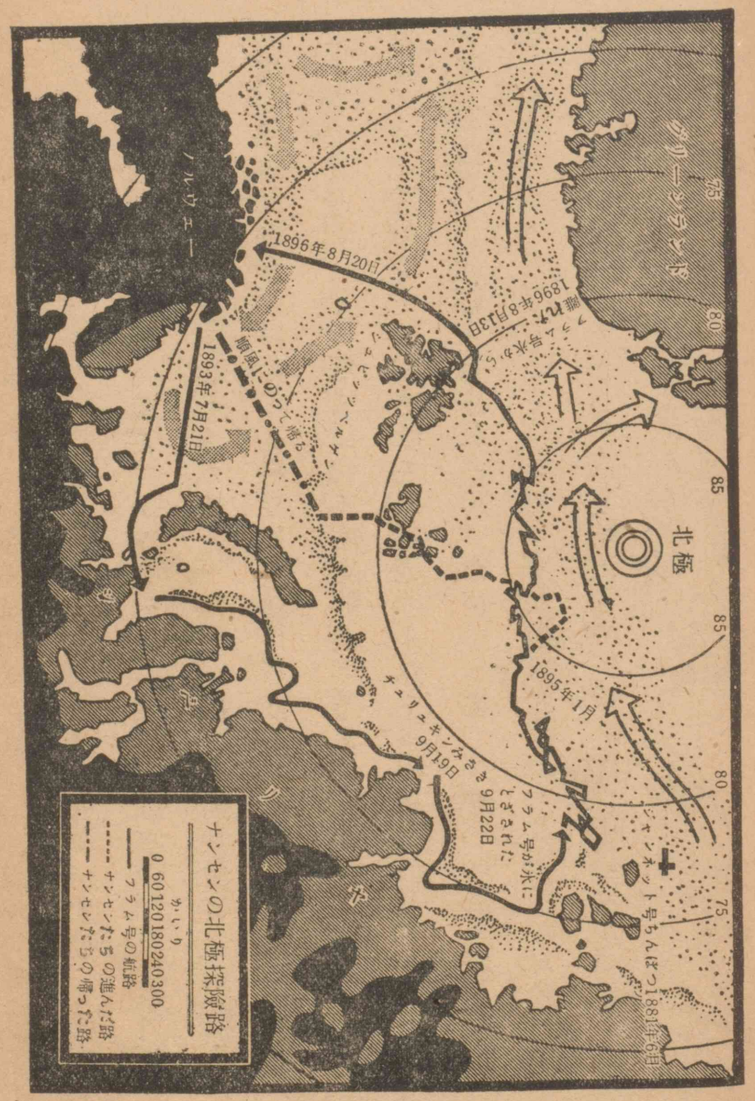
出てきた。その人々は、ハンケチをふりながら、ノルウェーの歌を歌って、別れのあいさつをした。

七月二十一日の朝早く、フラム号は、ノルウェーを後に、静かにシベリヤの海岸へ向かった。九月十九日、シベリヤの最北地てんであるチェリュスキンみさきを通りすぎ、それからまっすぐに北極へ進んでいった。九月二十二日、フラム号は、流氷群のおくの方へはいりこんだので、氷にしばりつけられ、プロペラやかじを引きあげて、氷の流れにつれて移動するようになった。こうして、乗組の人々は、世界のどこからも、全く切りはなされた。しかし、おそろしいことは少しもなく、家にいるのと同じぐらいに、ゆかいな生活だった。

おそろしいといえば、それは、ほとんど何もする仕事がないということだった。不健康や、不きげんなどが、そのために、生れそうになるの

である。そこで、ナンセンは、仕事の時間表をきちんときめ、すべての人が、せっせと仕事をするようにした。船の機関を取りはずし、そうじして油をぬってしまいこんだ。そのあとは、だいく仕事や、かじ屋仕事や、道具を作る工場に変えられてしまった。航海中に必要となるかも知れないすべての物が、この工場で作られた。自分たちのくつや、着物や、ほ、スキーをはじめ、手のこんだ科学器具でさえも——。

いろいろな観測や実験もまた、乗組の人々をいそがしがらせた。毎日、人々は、水深、水温、海水にふくまれている塩の分量、潮流の強さと方向、氷の厚さと性質などを記録した。海中の生物の見本を作るために、海底もさらった。一日おきに空を観測して、自分たちが、どれだけ、またどの方向へ移動したかも調べた。



八　氷の圧力

初めて、おそろしい氷にぶつかったのは、フラム号が流氷群にはいりこんで、三週間たってからであった。海潮が高まる時と低まる時とに、流氷群はゆれ動き、おそろしい力とうなり声をともなって、流氷と流氷とをきしませる。その圧力はおそろしいものであったが、ついに、フラム号の方が勝った。つぶされておしさげられたのは、氷の方であって、フラム号はぐいぐいっとゆれたが、やがて、どっかとこわれた氷の上に持ちあがった。

第二の冬には、もっとおそろしい「氷の圧力」にぶつかった。それは、潮の圧力のためにくだかれて、流氷群の上に積み重ねられた、小山のような大きな氷のかたまりである。一八九五年の一月、これらの氷のかたまりの一つが、まともにフラム号の真中にぶつかって、左のデッキを二メートルばかり氷の下にうずめてしまった。ふつうの船なら、その一打ちと、デッキの上にかぶさってきた氷の重みのために、つぶされたであろうが、フラム号はからだをねじって氷の上に立ちあがり、流氷を、力強い船体の下におしつぶした。

一年たっても、フラム号は、北の方へわずかにただよっただけだった。ナンセンは、だんだんに、がまんができなくなってきた。この調子でいけば、氷を通りぬけるには、七年か八年はかかるだろう。しかも、その後、フラム号がどうなるかもわからないのだ。ナンセンは、北極へ向かって、氷の上を突進したかった。冬の月光が、なめらかに北へつづく氷のおもてをてらしているのを見ると、ナンセンは、どうしても、そこへ向けてふみ入りたいと思うあこがれの心を、おさえることはできなかっ

た。

とうとう、十一月になるとすぐに、ナンセンは、自分の考えを全員に説明した。みんなは、それにさんせいした。いっしょに行くのは、力が強くて、スキーのうまい、ヒャルマン・ヨハンセンにきまった。

一八九五年三月十四日、ふたりは、三つの犬ぞりを持って、フラム号から四百マイル（一マイルは一・六〇九三四キロメートル）以上へだたった北極を目ざして出発した。

九　北緯八十六度十四分

初めの一週間は、一日に十四マイルから三十マイルも進んだが、まもなく、ほんとうの極地旅行が始まった。氷はますますでこぼこになり、高さ十メートルもある氷の小山が、あっちにもこっちにもあった。それ

をまわっていくことも、のぼっていくことも、同じようにむずかしかった。ふたりは、ひどい場所へ来ると、そりを手で持ち上げて、犬を助けた。寒さははげしく、着物はかたくこおりついてごわごわになり、手首は、こおったそで口にすれてきずができた。つかれ切ったふたりは、歩きながら、うとうととねむってしまうこともあった。夜とまる所へ来ると、ヨハンセンは犬の世話をし、ナンセンは夕食のしたくをした。それから夕食のできるまで、ふたりは、同じスリーピングバッグ（ねむりぶくろ）の中へもぐりこみ、寒さのために歯をガタガタさせながら、少しでもあたたまろうとした。犬たちは、次第に弱ってきた。

三月の終りになると、だんだんあたたかくなり、ふたりは、よくねられるようになった。零下二十度でも、北緯八十五度から北のそのあたりでは、まるで、夏のように感じられた。そして、晴れた日がつづいた。

けれども、氷の小山は、いつまでたっても、はてしなくつづいていた。犬は、もう、その前へ来ると、ごうじょうに、進まなかった。

四月になってから、とうとう、ふたりは、あれほどほね折って進んできたにもかかわらず、じっさいは、いくらも北へ進んでいないことをさとった。ふたりを乗せている氷は、ふたりの進む速さとほとんど同じぐらいな速さで、南へ流れていたからである。それまで、ナンセンは、北緯八十七度までは行けるかも知れないと考えていた。けれども、氷の状態はますます悪くなるし、氷が南へ流れていることから考えれば、もうここより北には、陸地はないものと思われた。

四月八日の朝、ナンセンはキャンプを出て、その辺で最も高いと思われる氷の峰にのぼった。氷、氷、氷、そして、はてしもなく、するどく切り立った氷の峰——もう、今までよりいい状態は、とうていないだろう。

ナンセンは、キャンプへ帰って、自分たちの位置を測定した。それは、北緯八十六度十四分、今までのだれよりも二百マイル、北極へ接近していることがわかった。

「きょうは休もう。それから、引っ返そう。もし、夏までにフランツ・ヨゼフ・ランドへ着くことができたら、冬のうちには、ノルウェーへ帰れるだろう。」

ナンセンは、ヨハンセンに向かって、そう言った。

氷の上に立てたノルウェーの国旗、おなかいっぱいの食事、スリーピング・バッグの中のねむり——それが、ふたりの、せめてもの、心か

らのお祝いだった。

一〇　フラム号帰る

それからのふたりは、なお、言葉にもつくせないほどの苦しい旅をつづけて、フランツ・ヨゼフ・ランドへ着くことができた。それは、ふたりが、フラム号をはなれて氷の上の人となってから、十五か月目、一八九六年六月のことだった。それから二か月たって、ふたりは、クリスチヤニヤへ向けて、自分たちの消息を打電した。そして一週間後、ナンセンは、次のようなしきゆう電報をうけとった。

「スキヤエルヴォ発。一八九六年八月二十日、午前九時。フラム号、本日、当地に着。乗員すべて無事。直ちにトロムセへ向けて出発。あなたがたもおめでとう。スヴェルドルップ。」

スヴェルドルップは、フラム号の指揮者である。ナンセンは、その電報を見て、しばらく、口もきけなかった。

ナンセンは、どもりながら言った。

「フラム号が、帰り着いた。」

次の日の午後、ナンセンを乗せたヨットは、風雨にさらされて長い旅をつづけてきた、たくましいフラム号のかたわらに、いかりをおろした。乗組の人々は、喜びの声をあげて、ナンセンをむかえた。

再び、ナンセンをむかえたフラム号は、やがて、南へ進んでいった。ノルウェーの人々の心は、喜びと誇りでいっぱいだった。ついに、ノルウェーの英雄が、全世界に向かって誇るべき仕事をなしとげたのだ。むかしのノルウェーの冒険家たちがよみがえり、ノルウェーの伝説の一ページ一ページが、息をふきかえしたようだった。ナンセンは、喜びに

誇る人々の心に打たれた。そして、自分が、どんなに、自分の祖国と、祖国のたくましい人々を愛しているかを知った。

これらの人々は、たいていは、この探険によって得られた、いろいろの発見については、そのねうちがよくわからなかった。けれども、流氷群の中では船がどんなに危険であるかということや、うえや、寒さや、死地をぬけ出すことなどについては、よくわかった。そして、人々は、自分たちがやる命がけの仕事が、やがては、ナンセンがなしとげたように、英雄的な仕事にもなるのだということを知った。

しかも、この航海は、科学的に、多くのかがやかしいけっかをもたらしたのであった。

一二　平和の人

くっせずたゆまず、限りない忍耐を以て世界に知られたノルウェー人の、その中にもすぐれたフリチョフ・ナンセン――この名は、きっと、少年たちをふるい立たせずにはおかないであろう。けれども、この後、ナンセンが身を以て平和のためにつくした、かずかずの仕事をわすれては、ほんとうに、ナンセンのことを考えるわけにはいかないのである。

フリチョフ・ナンセンは、世界大戦にきずついた多くの人々、そのために国をはなれ、身も心もきずついた多くの人々をすくい、あくまでも、平和のために、たたかった人である。

一九三九年度ノーベル平和賞をあたえられた、「ナンセン国さい避難民

(4) 発表，話し合い。

(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)(ヘ)のそれぞれのはんの研究を発表し，話し合いをする。

(イ) それぞれのはんで研究したことがらや，研究の仕方について，みんながわかるまで話し合いをする。

(ロ) ナンセンのえらいところを話し合う。

(ハ) ナンセンの「北極探険」と，マジェランの世界一周，コロンブスのアメリカ発見などと考え合わせる。

(ニ) ナンセンの人がらと生い立ちと，北極探険の仕事を考え，話し合いをする。

(5) 自由研究の問題を発表する。これはめいめいでやる。

自由研究問題の参考

(イ) 世界探険の人々

(ロ) 北極探険と南極探険

(ハ) コロンブス，バスコダガマ，マジェラン，ナンセン，アムンゼン，ノビレ，バード

(ニ) 日本の探険家（まみや林蔵，こんどう重蔵など）

(6) 「北極探険」の学習テスト

テストの当番のはんで，テストをこしらえて，みんなでやる。

事務局」に、その名をながくとどめたのはこの人である。

あるアメリカの記者が、

「ナンセンが通りすぎると、教会のとうも、夜中に頭をうなだれる。」

と言ったほどに、真実と人類愛とにその身をささげたのは、この人、フリチョフ・ナンセンである。

共同研究には，いろいろなやりかたがあるでしょう。めいめいの学校や，クラスによって，くふうすることにしたいものです。ここでは，「北極探険」の共同研究のれいを一つあげておきましょう。

これにこだわらないで，もっといいやりかたを考えてください。

まず，クラスを六ぱんに分ける。

(1) 研究計かくの話し合い

(イ) よく読めるようにれんしゅうすること。

(ロ) 文字や，言葉のわけを調べること。

(ハ) 話のすじを，しっかりと調べること。

一　ノルドマルカの森

二　少年フリチョフ

三　ヴィキング号

四　グリーンランド横断

五　氷上の木とごみ

六　フラム号

七　北極へ

八　氷の圧力

九　北緯八十六度十四分

十　フラム号帰る

十一　平和の人

この小題目について，話の大体を，はっきりと書き取る。

この(イ)(ロ)(ハ)の研究は，どのはんも進める。

(2) 話し合い。

(イ)(ロ)(ハ)の研究について，全体で発表や話し合いをする。

(3) 次の研究計かくの話し合い。

(イ) ナンセンの少年時代のことを，くわしく研究する。（第一ぱん）

(ロ) ナンセンの北極探険の地図をこしらえる。(大きく書いて，色どりをする。)（第二はん）

(ハ) 北極探険のことを，細かに調べる。参考書，写真などを集める。（第三ぱん）

(ニ) 北極探険で問題となったことを取り上げて，そのわけを調べる。（たとえば「氷上の木とごみ」というようなこと）（第四はん）

(ホ) 北極について調べる。（第五はん）

(ヘ) 「北極探険」の紙しばいか，げきをこしらえる。（第六ぱん）

みんなは，そういうことを話し合った。

上の文の「待った」,「話し合った」という言葉では,「た」のつかない，言い切りの形はどうなりますか。

このように,「た」のつかない，言い切りの形を考えてみると，

(1) あった / ある　(2) だった / だ　(3) なかった / ない

(4) 待った / 待つ　(5) 話し合った / 話し合う

などのように，いろいろになります。

「発電所」の文からぬき出した，こういう言葉を，みんなで話し合って，整理してみましょう。

6 待ってる

6「子どもの海」の「突堤」の中に，

だれか，待ってる。

きっと，待ってる。

とあります。これは，ふつうならば,「待っている」というところですが，話し言葉の調子で,「待ってる」となったの

です。

「……ている…」という言いかたは，次の「燈台」に，たくさんあります。

はなれている　はたらいている

集まっている　くらしている

この「て」は，こういう使い方をする時と，

いわしを取ってきて，

わたしは，あまりうれしくて，

などのように，文がとちゅうで切れる時にも使われます。

5 の問題で,「た」のない言い切りの形を考えたように，ここでは,「て」のない言い切りの形を考えてみましょう。

(1) 待って / 待つ　(2) はなれて / はなれる

(3) はたらいて / はたらく　(4) 集まって / 集まる

このようにして,「子どもの海」の詩の中から「て」のつく言葉をぬき出して，考えましょう。

前の「た」の時と同じように，整理してみましょう。また，それぞれの言葉に「た」をつけてみましょう。

7「北極探険」の共同研究

う。

三年のときに小鳥の鳴き声をまねてみましたね。こんどは，いろいろな動物の鳴き声を，書き表わしてみましょう。
かえるはどうでしょう。うさぎはどうでしょう。

放牧場のまわりを，ぐるりと一まわりして歩きました。

これも「放牧」の中の文ですが，この「ぐるり」は，音でも声でもありません。それでは，一体何を表わしているのでしょう。

……こっそり田畑へぬけ出して……

……ぞろぞろくっついてきました。

などにある，「こっそり」，「ぞろぞろ」なども，そうですね。「ぎっしり」「もぐもぐ」などたくさんありますよ。

今まで習ってきた文の中にある，こういう言葉を考えてみましょう。

お友だちのようすを，こういう言葉を使って表わしてみましょう。

5 あった，なった

(1) それには，次のような話があった。
　　それには，次のような話がある。

(2) すばらしいアイスクリームのごちそうになった。
　　すばらしいアイスクリームのごちそうになる。

上の二組の文を見ると，「ある」，「なる」というそれぞれの言葉に「た」がつくと，「あった」，「なった」となることがわかります。

「発電所」の中から，こういう言葉をひろい出してみましょう。ずいぶん，たくさんありますね。

きのうは日曜だった。

この「だった」は，「た」をつけない，言い切りの形ではどうでしょう。「日曜だる」では，おかしいですね。それではなんと言うのでしょう。

行きたくて行きたくて，たまらなかった。

この「たまらなかった」は，どうでしょう。「たまらなかる」とは言いませんね。なんと言うでしょう。

おとなしく待った。

(イ) 先生の文（意見，感そう，詩，歌など）
(ロ) 生徒の文（作文，記録，詩など）
(ハ) 学校の行事
(ニ) ほうこく，通信
(ホ) 父兄の文（意見，感そう，きぼうなど）
(ヘ) その他

(6) へん集の進めかた
(イ) 毎月十五日までに，げんこうを集める。
(ロ) 委員会で，集めたげんこうを調べて，のせるげんこうをきめる。
(ハ) 文と絵，文字の大小，のせる場所などをきめる。
(ニ) とうしゃばんずりにする。

(7) できばえの調べ
学校通信が発行されたら，そのできばえについて，いろいろな意見を出してもらう。委員も集まってこの話し合いをする。

光村小学校通信は，だんだんりっぱになってきました。そのへん集は，次のようです。

光村小学校　学校通信　　第十五号（六月）

1 夏にきたえよ

2 学校を美しく（作文）　五年　南　ただし
3 つゆのころ（詩）　六年　大野まさ子
4 うちの人々（作文）　四年　山下　八郎
5 その後の鳥のすばこ（ほうこく）　五年　二十名
6 夏のりん海生活のけいかく
7 六月の行事
8 子どもの不良化を防げ　父兄　北山　高
9 七月号のげんこうぼ集

4 音，声，ようす

放牧場の入口の木戸が，ギーッとあくと……

この「放牧」の中の文にある「ギーッ」というのは，木戸のあく音を言い表わした言葉です。これは，なくても意味がわからないことはありませんが，あった方が，ずっと文が生きてきます。

「学校通信」にあった「パーン」とか，「ズシーン」とかもそれですね。今までならった国語の本の中にある，こういう言葉を，もう一ぺん集めてみましょう。ずいぶん，いろいろな言い表わし方があるでしょう。

いろいろな物の音を，みんなで言い表わしてみましょう。

物の音を口でまねて，みんなで当てっこをしてみましょ

「上原君。」
と，太郎が言った。
「君，電気機関車のもけいを作るって，言ってただろう。」
「うん。」
「あれ，できたの。」
「できるもんか。まだ，材料も，すっかり整わないんだ。」
「じゃ，作るとき，ぼくにも手伝わせてくれないか。」
「ああ，いいとも，そのつもりでいたんだ。」
「上原君は，電気の技師になるんだろう。」
と，その時，良三が言った。

めいめいの会話には，必ず，めいめいの持ちあじが出てきます。

ですから，会話は，人物の持ちあじを書き表わすためのもっとも大切な方法です。会話によって，その人物の性質や，その時の心持などが，生き生きとうつし出されます。「かしの木広場」や，「発電所」の文に，もし会話がなかったらどうでしょう。これらの文の中に出てくる人物の動きや，その場のありさまが，目に見えてはこないでしょう。

いろいろな文について，会話のもつ力を，もっとよく考えてみましょう。

私たちの会話には，どうしても，めいめいの持ちあじが出てきます。物事にぞんざいな人は，ぞんざいな言葉を使い，ぶさほうな人は，ぶさほうな言葉を使います。

私たちの会話が，いつも，明るく，美しかったらどんなにいいでしょう。そうなるためには，私たちは，どうしたらいいでしょう。

3　学校通信のへん集

光村小学校の学校通信は，毎月一回発行されています。かべ新聞は，学校の子どもがいっしょに読みますが，学校通信は，とうしゃばんずりで，どのうちにもくばられるもので，うちの人も，いっしょに読むのです。

学校通信へん集の取りきめ

(1)　目あて　学校通信は，学校の仕事や，いろいろのようすを，生徒の家へ知らせるために発行する。
(2)　発行日　毎月一日
(3)　ていさい　わら半紙二まい，うらおもて，とうしゃばんずり。
(4)　へん集委員　五年，六年から男女一人ずつ，(四人)
　　一学きこうたい。先生一人。
(5)　へん集

また，そのほかに，どんなのがあるか，みんなで考えてみましょう。

「黄色なたんぽぽ」，「あたたかなたんぽぽ」というのは，「黄色いたんぽぽ」「あたたかいたんぽぽ」とも言います。

けれども，「静かないずみ」というのは，「静かいいずみ」とは，言いません。「へたな絵」は，「へたい絵」とは言いません。

「……な」という形だけの言葉と，「……い」という形にも使う言葉とわけてみましょう。

「美しい話」，「美しい緑」などの「美しい」も，やはり「黄色い」「あたたかい」などと同じように，物の色や，形や，性質や，感じなどを表わしている言葉です。

「すきな絵」の三つの詩の中に「……い」という形の，こういう言葉が，ほかにもありますか。

また，そのほかにもどんなのがあるか，みんなで考えましょう。

2 会話の力

「かしの木広場」や，「発電所」の文には，会話がたくさん

使われています。どんな会話が使われていますか。またどんなときの会話でしょうか。だれの会話ですか。

次の会話について考えてごらんなさい。

きょうは日曜だ。きのうから楽しみにしていた学校通信も，早く読んでしまいたい。けれども，天気はいいしすばこをかけに行く方が，どうもおもしろそうだ。

「ぼくは，なんにも持っていかなくってもいいの。」

「ああ。今すぐ，にいさんが来るから，そうしたら，君に持っていってもらうものがあるかも知れないよ。」

「しげるさんも，来るんだね。」

「ああ。にいさんが来ないと，こまるんだ。」

「どうして。かしの木広場なら，わかってるじゃないか。」

「だって，にいさんが，すばこをかけるんだもの。」

「なあんだ。しげるさんが，かけるのか。」

太郎はそれを聞いて，やっぱりそうだったのかと思った。

食べ終ると，四人は，言い合わせたように，ごろりと，あおむけになった。どこまで行ってもはてしのない青空が，ひろがっている。

新しい字

張（4） 緑（8） 様（9） 勉（19） 敗（19） 成（24）
功（24） 祝（26） 調（29） 宿（29） 営（30） 害（30）
特（30） 法（31） 参（31） 幹（34） 固（37） 働（38）
辺（40） 願（44） 約（46） 建（47） 材（47） 才（49）
観（52） 測（52） 昼（54） 望（54） 側（55） 輪（56）
録（56） 秒（56） 飛（57） 牧（59） 設（61） 験（62）
治（62） 育（65） 寄（66） 求（68） 塩（68） 移（68）
然（71） 団（72） 帯（73） 利（73） 難（73） 武（74）
温（77） 状（77） 態（77） 順（78） 経（79） 招（84）
械（85） 任（87） 提（88） 争（88） 得（90） 転（94）
完（96） 貯（99） 務（99） 問（101） 量（101） 管（102）
便（102） 備（103） 加（103） 減（103） 階（104） 圧（105）
技（112） 師（112） 横（118） 試（121） 政（124） 婦（124）
積（126） 似（127） 他（127） 愛（128） 極（129） 博（133）
未（134） 断（134） 精（134） 険（136） 品（136） 格（137）
万（137） 油（140） 厚（142） 歯（147） 報（150） 祖（152）
戦（153） 賞（153）

8 問　題

1 あたたかな，黄色な

たんぽぽの，黄色な花，
お日さまのように，あたたかな。

これは，「たんぽぽの花」の初めの部分です。この「あたたかな」は，何が，あたたかだというのでしょう。

これは，ふつうの言い方では，

お日さまのように，あたたかな，たんぽぽの，黄色な花。

と言うところです。ここで，じゅんじょをかえているのは，詩だからです。詩の場合には，このように，じゅんじょをかえて言うことがよくあります。なぜでしょう。

次の「いずみ」と「すきな絵」に，そういう言いかたがありますか。

「黄色な」，「あたたかな」という言葉は，色や，感じを表わしている言葉です。このように，物の色や，形や，性質や，感じなどを表わす言葉で，「……な」という形の言葉を，「いずみ」「すきな絵」の中からさがし出してみましょう。

ふけんこう……141
ぶさほう……(15)
ふすま……70
ふせけ(ふせぐ)……(17)
ふっとばして
(ふっとばす)……94
ぶつりがく……129
ぶな……47
ふなばた……139
ぶぶん……(11)
ふみにじったり
(ふみにじる)……70
ふもと……26
ブラッシュ……78
フラムごう……140
フランツ・ヨゼフ・
ランド……149
ブランクトシ……121
フリチョフ……128
フリチョフ・ナンセン127
ふりはらい
(ふりはらう)……79
ふりょうか……(17)
ふるくさい……114
ふるまわれて
(ふるまう)……65
プロペラ……141
ぶんりょう……142

へいきん……81
ページ……45
ベーリング
かいきょう……136
ヘクタール……70
へだたった
(へだたる)……146
へって(へる)……68
へび……29
へんあつき……105
ペンキ……61
べんきょうか……19

ぼうえき……138
ぼうけんか……151
ぼうすいズボン……136
ぼうっと……55
ほうほう……31
ほうぼく……59
ほうりつか……128
ほくい……147
ぼくしゅさん……66
ぼくじょう……60
ほぐれて(ほぐれる)‥25
ほしぐさ……65
ほそめた(ほそめる)‥110
ほっきょくぐま……133
ほっきょくけん……129

ほっぴょうよう……136
ほととぎす……115
ほねぐみ……127
ほばしら……118
ボルト……105
ぽろりと……79
ほんき……23
ほんらい……71

マーガレット……99
まきつける……40
まくりあげた
(まくりあげる)‥‥123
まごつかず(まごつく)63
マジェラン……(24)
まずかった(まずい)‥25
ますます……26
まっさおな……120
まっさき……27
まつばやし……117
まなぶ……138
まねて(まねる)……(17)
まみや・りんぞう‥‥(24)
まるっこかった
(まるっこい)……138

みいり……138
みかづき……56

みかづきがた……56
みき……34
みごと……26
みずたまり……80
みずみずしい……9
みそ……81
みち……134
みちびかれて
(みちびく)……67
みつばちかい(かい)‥25
みぬいて(みぬく)‥‥76
みね……134
みはり……73
みはりごや……66
みほん……142

むぎばたけ……62
むくどり……28
むしピン……9
むしりとって
(むしりとる)……79
むぞうさ……8
むだぐち……100
むだづかい……135
むらさきっぽく……57

めうし……123
めきめき……75
めざましい……133
めだって(めだつ)‥‥30

もくろく……136
もぐって(もぐる)‥‥79
もともと……71
もみ……47
もらす……115
もれて(もれる)……47

やかましい……104
やく……101
やけど……125
やすらかに……121
やせて(やせる)……70
やぶった(やぶる)‥‥126
やまがら……28
やや……57
やんちゃ……77

ゆうぐれ……57
ゆうびんうけ……13
ゆか……139
ゆきかう……121
ゆたか……47
ゆびわ……56
ゆるされて(ゆるす)‥126

ようぐ……62
よこたわる……134
よこっぱら……118
よごれ……78
ヨジウム……77
よじのぼらせる
(よじのぼる)……130
よみがえり
(よみがえる)……151
よわって(よわる)‥‥134

らくど……80
ラグビー……74

リットル……80
りっぽうメートル‥‥101
リノリウム……139
りゅうすい……103
りゅうひょうぐん‥‥129
りょう……73
りょう……102
りんかいせいかつ‥‥(17)

るすばん……48

わきめ……69
わぎり……13
わずか……145
わらばんし……(15)

たゆまず(たゆむ)…153
たんけんか……137
たんけんせん……136
だんたい……72
たんまり……79

ち……79
ちい……134
チェリュスキン
　みさき……141
ちか……105
ちきゅう……132
ちぎれて(ちぎれる)‥56
ちけい……73
ちじく……132
ちぶつ……73
ちゅうがい……30
ちょうりゅう……129
ちょすいち……99
ちょすいりょう……101
ちょぞうひん……136
ちりがくしゃ……137
ちんぼつ……136

つが……47
つきあわせたり
　(つきあわせる)‥‥66
つくづく……82
つけね……79
つぶす……137
つまさき……78
つめ……73
つやつや……60
つらなる……127
つりば……111

てあつく(てあつい)‥77
ていきょう……88
ていさい……(15)
できばえ……(16)
てくび……147
でくわして(でくわす)65
でこぼこ……146
てじか……31
てっかん……102
デッキ……145
てづくり……60
てつごうし……102
でんあつ……105
でんき……97
でんきかんしゃ‥ 111
でんせん……109
てんとりむし……19

どうさ……127
とうさ……65
とうてい……96
どうぶつがく……129
とくはい……81
とけかかった
　(とけかかる)‥‥‥130
とざして(とざす)‥‥131
とじこめられた
　(とじこめる)‥‥‥133
とっくみあい……88
とっしん……145
とって い……116
とどめた(とどめる)‥154
とどろく……120
とほう……68
とら……73
とりいれぐち……102
とりわけ……78
どろ……130
トロムセ……150
どんぐりやま
　(どんぐり)……25

ながのけん……62
なにより……99
なまきず……77
なまづめ……78
なまりいろ……57
なめらかに……145

なん……73
ナンセンこくさいひな
　んみんじむきょく‥153

にぎわい……52
にさいごま……65
にしゅーケル……127
にっこう……47
にっしょく……52
にゅうがく……128

ねうち……152
ねじって(ねじる)‥‥145
ねずこ……47
ねずみいろ……118
ねっちゅう……124
ねとまり……48
ねべや……139

ノーベルへいわ
　しょう……153
のぞんで(のぞむ)‥‥97
のっぽ……75
のてん……70
ノビレ……(24)
のりもの……46
ノルウエー……125
ノルドマルカ……123
のろい……46

バード……(24)
はいあがつて
　(はいあがる)‥‥‥79
はいでんばんしつ‥‥105
ばいんぎゅうしょく‥80
はがさない(はがす)‥78
はぎとり(はぎとる)‥125
はきはき……113
はくぶつかん……133
はげて(はげる)‥‥‥35
はだか……48
はちきれそう
　(はちきれる)‥‥‥84
はつか……31
はつでんき……102
はつでんしょ……84
はつめい……132
はづめまわし……78
はなしがい……19
はなれて(はなれる)‥35
はにかんだ(はにかむ)25
バラック……61
はらばい……133
ばらばら……100
はりがね……29
はる……4
バルヅル・ナンセン‥128
はれぎ……26
ひかえて(ひかえる)‥134
ひきつけられ
　(ひきつける)‥‥‥137
ひけ……96
ひずめ……70
ひとがら……(24)
ひとで……30
ひまつぶし……139
ヒャルマン・
　ヨハンセン……146
ひよう……47
ひょうけん……129
びょうしゃ……77
ひよけ……80
ひょろっと……75
ひろば……26
ぴんと……73
びんながまぐろ‥‥‥121

フィリー……77
ふうしゃ……139
フェルト……139
ふくれあがつて
　(ふくれあがる)‥‥79
ふけって(ふける)‥‥126

こんなん……96

サイドカー……53
さいほくちてん……141
ざいもく……47
ざいりょう……85
さく……67
ささえられた
（ささえる）……139
ささなみ……101
さとった（さとる）…148
さびしさ（さびしい）‥72
さまざま……42
さらされて（さらす）…9
さらった（さらう）…142
さわら……47
さんこう……31
さんごう（ごう）……44
さんこうしょ……（23）
さんりんち……30

しうち……71
しお……68
しおなめだい……80
じか……113
しがいせん……75
しかけて（しかける）‥102
じかんひょう……142
しきしゃ……151
しきゅうでんぽう…150
しけんせん……121
し……71
じじつ……132
しじゅうから……28
じしん……24
しせつ……97
したがって……105
したしさ……71
したてたり（したてる）80
しち……152
じちかい……62
しちわり（わり）……81
しつがい……105
じっけん……62
しっぱい……19
しつもん……100
しのぐ……73
しのびね……115
しばはら……99
じびびき……49
しまいこんだ
（しまいこむ）……142
じむしょ……99
じむしつ……106
しめっぽく
（しめっぽい）……46
しゃりん……125
ジャンネットごう…136
しゅうい……101
じゅうよう……138
しゅちょう……138
しゅと……127
シュトレ・フレーン‥123
しゅにん……87
シュピッツベルゲン‥130
じゅんぐり……78
じゅんじょ……（11）
しょうそく……150
しょうたい……84
じょうたい……77
じょうはんしん……48
じょがっこう……38
じょしゅ……16
じんかく……137
しんけいすいじゃく‥79
しんじつ……154
しんたい……134
じんぶつ……（14）
しんぶんしゃ……53
しんぼう……86
しんよう……137
しんりんでつどう……46
じんるいあい……154

すいおん……121
すいしゃ……104
すいしん……142
すいそう……102
すいちゅう……138
すいふ……137
すいぶん……81
すいめん……121
すいもん……102
スヴェルドルップ…150
すうがく……129
スキャエルヴォ……150
すくすくと……123
スクラム……74
スケート……125
スピードスケート…126
すべらせて（すべる）‥126
スポーツ……127
スポーツマン……128
すらりと……54
スリーピングバッグ‥147
すりもの……43
すりよせたり
（すりよせる）……66
すれて（すれる）……147

せいいく……136
せいこう……24
せいし……139
せいしん……134
せいぜい……80
ぜいたく……69
せいねん……39
せき……80
せっきん……149
ぜったい……100
せっぱ……74
せつび……139
せめて……149
せんしゅ……88
せんしゅけん（けん）‥125
せんぱい……51
せんもん……129
せんりょう……29

そうい……50
そうごん……126
そうとう……48
そかい……62
ぞくぞく……55
そくてい……149
そこく……152
そだった（そだつ）…65
そでぐち……147
そなえられ
（そなえる）……105
そらおそろしく
（そらおそろしい）‥68
そらし（そらす）……139
ぞんざい……（15）
そんゆうち……47
そんゆうりん……47
だいいっかい（だい）‥62
だいがくせい……128
だいじけん（じけん）‥51
だいずがら……65
たいする……127
たかります（たかる）‥79
たくましい……126
たくみ……73
だしぬけに……94
ただよって
（ただよう）……106
だでんした
（だでんする）……150
たどりついた
（たどりつく）……132
だに……78
たにがわ……48
たにん……127
たまさか……82
たまに……75
たもつ……139

（おさえつける）…109
おさない……9
おす……77
オスロー……127
おそいかかって
（おそいかかる）……74
おそわれた（おそう）…73
おだやかな……127
おっかけっこ……77
おっと……39
おてんば……77
おの……48
おびた（おびる）……57
おもいやり……127
おもくるしい……109
おんど……132

か……126
がい……30
かいがんぞい（そい）…135
かいけつ……132
かいすい……142
かいそう……136
かいちょう……144
かいてん……105
かいぬし……65
かいよう……138
かえる……（18）
かがくしゃ……114
かがやかしい……152
かかわらず
（かかわる）……148
かきいろ……118
がくしゃ……52
がくしゅうテスト…（24）
がくもん……129
かけぐち……19
かけん……103
かこまれて（かこむ）…25
かじ……141
かし……26
かじや……142
かじりついたり
（かじりつく）……34
かずかず……153
かせいふ……124
かたむいて（かたむく）42
かたわら……151
かちく……71
がっき……139
がっこうつうしん
（つうしん）……12
がっしょう……115
かてい……128
かなきりごえ……124
かなづち……125
かみくず……100
かんじん……85
かんせい……96
かんそく……52
かんびょう……77

きかい……133
きかん……142
きかんちょう……118
ききゅう……57
きぐ……132
きこり……48
きしむ……129
きしゃ……154
きしょう……77
きしょうだい……53
きずついた
（きずつく）……153
きたアメリカ……129
きちょうめん……128
きど……66
きのぼり……20
きば……73
きびきび……113
きぼう……（16）
きみ（きみがわるい）…29
きゃくしゃ……46
キャンプ……148

ぎゅういんばしょく…80
きゅうよう……31
きょうけん……134
ぎょうじ……（16）
きょくち……131
ぎょぐん……121
きよめる……81
きりたった
（きりたつ）……123
キルク……139
キログラム……81
キロワット……105
きわだって（きわだつ）62
きんかんしょく……54
きんせい……56

ぐいぐいっと……144
くぐり（くぐる）……120
くさかりがま……55
くし……48
くだ……102
くだかれて（くだく）…144
くちびる……124
くっきりと……62
くっせず（くっする）…153
くばられる（くばる）…（15）
くま……73
くりいろ……60
クリスチャニヤ……127
クリスチャニヤだい
がく（だいがく）…128
グリーンランド……130
ぐるりと……42
くろしお……120
くわだて……137

けあけたり（けあける）72
けいかく……（17）
けいき……105
けっか……152
けっこう……134
けっこう……145
けつまずいて
（けつまずく）……78
けなみ……82
けば……67
けんおん……77
けんがく……19
けんこう……（16）
けんせつ……62
けんびきょう……63

こいしく（こいしい）…67
こうか……31
こうさく……50
ごうじょう……148
こうそうきしょうだい57
こうだいな……129
こうてい……56
こうとうがっこう……18
こうやまき……47
こおった（こおる）…124
こがい……129
こくゆうりん……46
こころみて
（こころみる）……135
こさめ……54
こすりつけたり
（こすりつける）……79
こだわり……87
こっき……149
コック……118
こづつみ……125
こゆる（こゆ）……84
こらして（こらす）……56
コルト……77
ころけまわったり
（ころけまわる）……91
コロナ……55
ごろりと……111
ごわごわ……147
こわれめ……71
コンクリート……104
こんどう・じゅうぞう（24）

国語編修委員会

島津久基
坪田譲治
松尾弥太郎
竹内良助
本間平安子

(本社)

井上赳
高藤武馬
服部直人

挿絵及装釘

白崎海紀

感謝

「たんぽぽの花」は、阪本越郎氏の作品、「放牧」は、小津茂郎氏の作品の一部、「突堤」のうたは、北原白秋氏編「兒童自由詩集成」中の兒童の作品、「新しい船」のうたは同氏著「兒童詩の本」中の兒童の作品であります。本書に採用するにつき、快い御同意を得、深く感謝いたします。なお、「北極探險」は、林要氏訳「ナンセン傳」によりました。

Approved by Ministry of Education (Date Oct. 31, 1949)

太郎花子国語の本

かしの木広場 小学校5年用上

昭和24年11月20日 印刷
昭和25年1月15日 発行
(昭和24年10月10日 文部省検定済)

小国 513

著作者 日本書籍国語編修委員会
代表者 井上赳

発行者 日本書籍株式会社
代表者 木村淵之助
東京都文京区久堅町108番地

印刷者 日本書籍株式会社
代表者 木村淵之助
東京都文京区久堅町108番地

発行所 東京都文京区久堅町108番地 日本書籍株式会社

¥ 28.50

新しい言葉

( )の中の数字は問題のページです

アイスランド……130
あいする……128
あおくさ……26
あおざめた
(あおざめる)……124
あおぬり……125
あかチン……77
あかつち……117
あかぬり……125
あくまで……134
あこがれ……145
あざらし……129
あすなろ……47
アスピルンセン……123
あせる……71
あたえられ(あたえる)67
あっけなかった
(あっけない)……109
あつさ……142
あつりょく……139
アデライデ・ナンセン127
あめます……123
あらされて(あらす)……70
あわよくば……71
あんぜんちたい……73
いいんかい……(16)
いかり……151
いだい……135
いたやね……53
いちがっき(がっき)……(15)
いちびょう(びょう)……104
いちょう……70
いっしゅ(しゅ)……129
いっしょう……59
いって……73
いどう……130
いぶしガラス……55
いぼ……79
いやしい……85
いりえ……123
いろえんぴつ……8
いろどり……(23)
いわし……119
いんさつや……125
ヴィキングごう……129
うえ……152
うけついで
(うけつぐ)……127
うたがい……135
うちこんで(うちこむ)19
うなだれる……154
うなりごえ……144
うねって(うねる)……28
うのはな……114
うまたちば……73
うみなり……120
うらうら……139
うらんで(うらむ)……71
えいゆう……151
えいゆうてき
(えいゆう・てき)……152
えいりんしょ……30
エスキモー……136
エレベーター……107
エンジン……139
えんぶん……81
おうかがい(うかがい)77
おうだん……134
オートバイ……53
オーバー……128
おきづき(きづく)……45
おくびょう……72
おことわり(ことわり)97
おさえつけられ

かしの木広場

（5年上）

五年
赤坂史郎

NIPPON SHOSEKI